

～くぬぎの森～

第 22 号

2011年2月1日
熊本高等専門学校熊本キャンパス
図 書 館



〈チューリップ〉

目 次

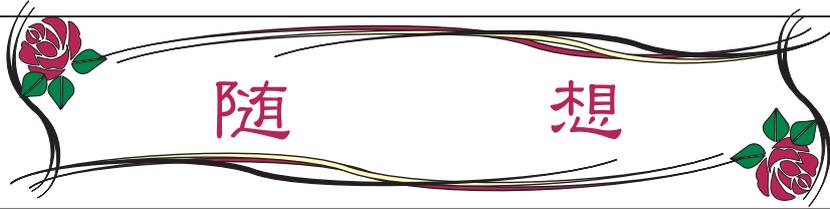
〈随 想〉

図書館のかおり	図書館長	三 好 正 純	2
読書について	人間情報システム工学科	村 上 純	3
図書館での勤務を通して	情報通信工学科4年	柴 田 美 紀	5
図書館のバイトで得たこと	情報通信工学科4年	畑 本 珠 実	5
図書館バイトの感想	電子工学科4年	首 藤 史 人	6
図書館職員のバイトをして	電子工学科4年	諏 訪 久美子	6
図書館勤務を通して	情報工学科4年	野 口 裕華子	6
図書館勤務の感想	情報工学科4年	福 山 恵 理	7

<平成22年度第32回校内読書感想文コンクール 選考結果及び作品紹介>	8
<第56回青少年読書感想文全国コンクール熊本県審査入賞者>	27

<図書館からのお知らせ>

図書館利用案内・お知らせ	28
ベストリーダー	30
「図書館だより」編集担当委員	32
編集後記	図書館運営委員 大石 信 弘 32



随 想

図書館のかおり

図書館長

三 好 正 純

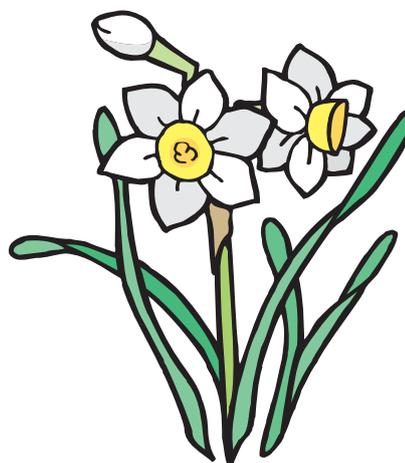
図書館に行くと、それまでの慌ただしさを忘れ、豊かな気分になれる。静かな館内にいくつもの書架が並び、たくさんの本に囲まれると、私だけかもしれないが、林の中で森林浴をしているときのような気分になり、心が落ち着く。本がきちんと整理されていて、ゆったりとした時間が流れている。見渡すと近くには雑誌や趣味の本が置かれ、奥の方には天文や哲学といった専門書のコーナーがみえる。それぞれのコーナーに関係の本が並んでいると思うと、知的好奇心が湧いてくる。もちろんすべての本を読むわけではないが、知的空間に居ることが心をわくわくさせる。多くの本に囲まれることでは大型書店も同じであろう。しかし、図書館は人が比較的少なく、一人ひとりが静かに個人の世界に浸っている。たおやかで清楚なかおりがする。

知的空間といえばインターネットの世界も広い。しばしば信頼を欠く情報もあるが、情報の量は図書館に比べ、はるかに大きい。表現形態も文字や写真のほかに音や映像など、マルチメディアが駆使されて多様である。また、Google や Yahoo に代表される検索エンジンのおかげで、さまざまな情報が簡単に手に入る。電子化された書籍は電子書籍と呼ばれる。今、電子書籍を読むための端末機器としてタブレット PC（平板のタッチ式パネルで表示と入力ができる携帯パソコン）が普及してきており、文字サイズを自由に変更できたり、本をめくるようにして読み進められたりするなど、利用者も急増している。電子書籍など電子化された情報をデータベースに集積しインターネットで配信するサイトが電子図書館である。電子図書館は、いつでもどこでも利用でき、検索も容易で複数の利用者が同時に同じ資料を使用することもできる。また、ある電子図書館から別の電子図書館へ資料のリンクを提供することで連携も

図り易い。先日、私は試しに電子図書館の一つである国立国会図書館 (<http://www.ndl.go.jp/jp/data/endl.html>) のサイトに入ってみた。図書館サーチでキーワードを入れ検索すると、目的の著書が簡単に出てきた。このように便利な電子図書館ではあるが、問題点も多い。コピーで複製を簡単に作ることができることから著作権法との関係や、IT（情報技術）のインフラ整備が進んでいるところとそうでないところとの情報格差など、多くの課題を抱えている。しかし、今後さらに書籍の電子化は進むといわれており、時流は電子図書館を求めるだろう。

さて、図書館は情報の量や利便性の点では電子図書館にかなわない。そのために、電子図書館の出現が図書館の存在を脅かすとの声も聞かれる。しかし、図書館には特有のかおりがある。本を一望するとき知的空間の広がりを感じ、静かな空気が心を落ち着かせる。このような図書館のかおりは電子図書館にはない。さらに、図書館には思いがけない出会いもある。何気なく書架の間を歩いていると、ふと目についた1冊から新しい興味が広がることもある。電子図書館のようにキーワードで目的の書籍を検索するのではなく、本に囲まれた館内を散策する、図書館ならではの楽しみ方であろう。

本図書館はこれからも、電子図書館の利点を積極的に取り入れながら、図書館のかおり漂う、ふと立ち寄りたくなる場を提供したい。



読書について

人間情報システム工学科
村上 純

I 目的

『月光に書を読む』（鶴ヶ谷真一著）という本がある。読書の好きな方はご存知だろうが、読書に関する蘊蓄を傾けた本である。「名もなき読書家」という題の一文では、太田南畝の随筆『仮名世説』に出てくる「いわくありげな人物」が取り上げられている。文政の頃今の神田橋と一ツ橋の間辺りで、往来の人に茶を煎じて商っていた孫市という人である。この人、「つねに好みて書を読み」、「雨などふりて徒然なる時は二階にあがりて側に酒一陶をおき、これをのみつゝ、文選をさかなにしたのし」んだ。文選とは中国の南北朝時代に昭明太子によって編纂された詩文集で、奈良、平安時代には貴族の必読書であった。鎌倉、室町時代には衰えたものの僧侶によく読まれ、江戸時代には限られた階層以外にも広がっていた。孫市は、「淳朴にして人と対話するにさらに人の善悪をいはず」、「花の比ころは東えい（上野東叡山）、飛鳥のほとり、おのがこゝろのまゝにあそびくら」した。

著者の鶴ヶ谷氏は、「孫市という人物の清々しさとは、読書が何の役にも立たなかったところにあ」り、孫市が本に求めたものは自覚されないほど深いもので、「いっさいの実用性をこばむほどに読書の欲求は切実なものだった」として、「情報を求めて本を読む場合、情報さえ得られれば用は足りる。さしたる目的もなしに日々本を読む人には、生きるといふことにかかわるより深い動機があるかもしれない。結局のところ、読書とは無償の行為であり、だからこそ、ときに無上の喜びを与えてくれることを、孫市はよく知っていたのだろう」と書いている。

この本の後半、全体の半分以上の分量を占めるのが「読書人柴田宵曲」。明治に生まれた歌人で随筆家でもあったが、文壇やジャーナリズムと関わりを持たず、「あえて世に出ようとはせず、市井に身を置いて好きな本を読み、敬愛する諸士を訪ねて教えを乞い、心を許した友人たちと長い親交を重ねるといふ、現代では稀な生き方をつらぬいた」。子規没後、子規の母と妹の暮らす庵に日参して、自筆稿を

浄書し全集編纂に携わったことでも知られる。鶴ヶ谷氏は、宵曲とは友人であった書誌学者・随筆家の森銑三の文を引いている。要約すると次の通り。宵曲の著書は読書によって培われた該博な蘊蓄が凝縮して自ら成ったものであるが、著作目的で書を読んだのではなく、ただ書が読みたくて読んだのである。無目的の読書家で、著書は受動的態度で書かれたが、読書に対しては能動的だった。結局、「読書人柴田宵曲と呼ぶことには、氏も意義を挟まないだらうといふ気がする。氏は実に読書を楽しむ人だつた。書物に親しむこと以外に、何の楽しみも求めようとしなかつた。氏は最も純粹なる読書家だつた」。

同じ著者の『古人の風貌』もお薦めである。「過去を思い描くよすがとして」古い本を取り上げ、その中に面影を留める昔の人物の肖像を描いた本。特に、冒頭の岡本綺堂が印象に残る。

II 意志

昨年末に亡くなった高峰秀子が日本映画を代表する女優であるということは言うまでもないだろう。が、私は全く詳しくなくて、彼女の映画も見ることがない。『高峰秀子の流儀』（斎藤明美著）という本がとてもよかったから読んでみたらと、私以上に濫読の父からもらってきて積読状態にしていた本を、最近読んでみたところ確かによかった。著者は週刊誌記者などを長年勤め、人から「怖い人」と言われる高峰にインタビューして信用を得、高峰夫妻を「とうちゃん」、「かあちゃん」と呼ぶほど親密な交流を続けた人である。これまで取材をした著名人は延べ千二百人に及び、その四分の一を占める女優の取材から、「女優はスクリーンや画面の中だけで観るべし」という結論を得たそうである。しかし、その認識を覆した唯一の人が高峰秀子だった。

秀子は四歳の時に実母を亡くし、叔母の養女となった。小さい頃から読書が好きだったが、「五歳の時から映画界で働いて親族を養い、小学校も満足に通えなかったから、本どころではなかった」。「足し算はできても、引き算や割り算ができない。地理を知らない」。「辞書の引き方を知らず、読めない字がある時は、別の媒体でその同じ字を探して、読み方を知ろうとしていた」。助監督だった松山善三氏と結婚してからそれらを教えてもらったそうだ。「五十五歳で女優業を引退して」からは「待つてま

したとばかりに今度は原稿を依頼され、また読書に浸る時間は持てなかった。「喧嘩ごしのように執筆依頼を断り続け」、「ここ数年、漸く、思う存分本が読めるようになった」。

近年は、「テレビも観なければ、音楽も聴かず、電話も人からかかってくることはあっても、自分からは滅多にしない」、「一歩も外に出ず、誰にも会わず、インタビューや執筆の依頼も頑として受けず」、「三度の食事の支度以外はひたすらベッドで本を読む日々」で、輝かしい業績には全く興味を持たず、過去を振り返らない潔い生き方を淡々と続けた。彼女の何がそのような生き方をさせたのか。斎藤氏はこう書く。「私が高峰秀子という人間を見ていて、言えることは、一言、“意志”である。こうありたい、こうあれかしと願う意志。そしてもっと重要なことは、その意志を実行に移すための“知性”である」。そして、それは「本人さえ望めば、いくらでも手に入れることができる」ものである。

Ⅲ 方法

最近読んだ本から紹介する。『父を焼く－上野英信と筑豊』という本で、『蕨の家－上野英信と晴子』に続けて読んだ。著者は上野朱氏で、筑豊に移り住み炭鉱の記録者として著書を遺した父とそれを支えた母を書いたのが両書である。朱氏は現在古書店を経営されているそうだが、巧みな文章で面白い。どちらにも取り上げられているのだが、英信の自宅であり地域住民にも開放されていた筑豊文庫を度々訪れ、上野家とは懇意だったフォトジャーナリストの岡村昭彦についての記述は興味深かった。ベトナム戦争の取材などで著名な（昭彦は、駆け出しの頃から、世界中の紛争地域を飛び回るようになって、年に数度は同文庫に滞在した。特に気が合った晴子は、彼の好む生きのいい魚を求めて食卓に載せる。その嗜好から、上野家では）「岡村ネコ」と呼ばれていたらしい。その彼について著者はこう書いている。「岡村ネコの読書量はものすごかった。彼が我が家に持ち込んだ段ボール百箱以上にのぼる本で、かつては剣道場であった二十畳ほどの部屋は埋め尽くされ、私たちはそこを大英図書館と呼んでいたのだが、舞阪の自宅にはその十倍以上の本が詰め込まれていたように思う。床から天井まで本棚になっていて梯子が掛けられ、二階へ上る階段もその

半分は本棚と化していた。ものごとの原因を探るためにはありとあらゆる資料を集めて読破する。そして徹底的に遡ってゆく。『歴史の結び目を探し、世界史のしっぽをつかまえる』というのが彼の仕事の進め方らしい」。そして、「方法に迷うのは、目的がはっきりしていないからだ！」と何度も叱られながらも、教えられ、可愛がられたようだ。

岡村についてインターネットで検索してみた。そうしたら、静岡県立大学の図書館に岡村昭彦文庫というのがあることが分かった。蒐集された約18,000冊の蔵書が収められ、閲覧に供されている。リストのエクセルファイルをダウンロードすると、その膨大さと多方面への広がりには驚く。

Ⅳ 余白

この図書館便り「くぬぎの森」に駄文を書かせてもらうようになってもうずいぶん経つ。私の読書にはこれといった確固とした目的はない。時間があれば第一に読書に振り分けたいし、そのために時間を作ろうとするから、意志的ではある。多くの本を読むうちに、「歴史の結び目を探し」たいと思うようになって、それをまとめるよい機会をいただいたと思っている。まとめることにより、知識や考えが整理され、次の興味分野、次に読む本を探すのに役立つ。

昨年からは、「世界史のしっぽをつかまえ」ようと、大航海時代やオランダ、イギリス、ロシアなどの歴史に関する本を読み漁っており、ギリシャやローマにまで遡るかも知れないし、興味の中核のアジア以外、南米やアフリカなどに広がる可能性もある。また、歴史は現在にも繋がっている。やっと「しっぽをつかまえ」かけたところで、まだ頭の中には、何かまとまった形のものできて来ないし、当然熟成や発酵にも至らない。しばらくは楽しむそうでも嬉し。そういう訳で、今回は失礼ながら埋め草的文章でご勘弁願いたい。もともと時間的な余白を埋める無目的な読書であるのだから、空間的にお役に立てば幸いである。

図書館での勤務を通して

情報通信工学科4年

柴田美紀

私が、図書館のカウンターの仕事をしたと思ったきっかけは、条件がよかったからです。寮生なので場所は近いし、見た感じ楽しそうでした。また、面白そうな本がカウンターの横にたくさん並んでいたのが前から気になっていたの、この機会に読みたいなと思ったのも理由の一つでした。

実際に仕事をして、こんな楽なバイトがあっていいのか!と思うくらい楽し、本にふれる機会もとても多くなりました。しかし、良いことはもっとたくさんありました。

まずは、図書館の職員さんたちがとても優しく、面白いという事を知れたことです。いつも、にこやかに接して下さって、楽しくてついつい長話をしてしまいます。実をいうと、学生たちは学生課の職員の方たちに少し距離感を感じていると思います。普段、関わる機会は無いですし、話をする時も小さな窓から事務的な話を事務的にするのみです。

この図書館は、そんな学生と学生課の方たちを繋ぐきっかけになっているように思います。今となつては、週に一回の楽しみですし、もうすぐこの仕事も終わりと思うととても寂しく思います。

最初に、面白そうな本が並んでいたと書きましたが、このディスプレイの仕方は図書館職員の宮本さんの工夫だそうです。私が図書館に興味を持つきっかけにもなった場所が、どうやって生まれたのか知ることができたのもこの仕事をしたお陰です。他にも、ブックハンティングやリクエスト等、学生達の意見をたくさん取り入れて下さいます。

この図書館は多い日で500人以上の人が訪れます。それは、職員さんの温かさと、親身に学生の意見に耳を傾ける姿勢の賜物だと思います。

とても、素敵で居心地の良い図書館なのでもっと多くの人にその魅力を知ってほしいなと思いました。

図書館のバイトで得たこと

情報通信工学科4年

畑本珠実

図書館のバイトを始めたきっかけは、寮の先輩に図書館のバイトは楽しいということを聞いていたの、興味があったためです。初めは覚えることがたくさんありそうで不安でしたが、図書館の職員の方々が優しく、いつの間にか不安がなくバイトができていました。

図書館のバイトをすることにより得たことは大きく2つあります。

1つ目は、バイトをする以前は図書館を利用することが、実験の資料を探す以外はあまりありませんでした。しかし、本に囲まれた環境では何気なく本に手がいき、気軽に本を借りるようになりました。そのおかげで頻繁に本を読むようになり、この1年間で様々な本を読みました。そして、ブックハンティングにも参加するようになり、バイトをすることによって、本に興味を持つようになったということが一番自分が変わったことでした。

2つ目は、図書館を利用する人と会話ができ、特に先輩方には進路に関する事を質問するきっかけの場を得ることができました。テスト期間には特に利用者が多く、図書館は勉強する人で溢れている状態でした。このような場を目にすると、私自身も勉強しなきゃなというやる気をもらいました。職員の方もよく話し掛けてくれたので、様々な知識を得たり、楽しい時間を過ごすことができました。

だいたい週に1回のペースなので、負担は全くありませんでした。これほどいいバイトはないのかと思うくらいです。バイト期間が終わっても、たくさん図書館を利用したいと思います。

図書館バイトの感想

電子工学科4年

首藤 史人

1年間という短い期間でしたが、バイト中は、とても充実した時間を過ごせたのではないかと思います。一番の魅力は自分の勉強や読書をしながら、仕事ができるということです。また、週に1回くらいしかまわってこないということで、テスト期間中でも全く問題ありませんでした。図書館の方々もとても優しく、良い雰囲気の中で仕事が出来ました。本当はもう1年間くらいやりたい勢いですが、ここは来年の4年生に引き継ごうと思います。

ここだけの話、3年生までは図書館の利用はそこまで多い方ではなかったのですが、このバイトを始めてから利用することがとても多くなりました。利用するようになってから、漫画ばかり読んでいた私が小説などにも手を伸ばすようになり、今までに見えていなかった本の新しい可能性を見ることができました。専門書から、小説、英語の本まで、様々な本が置かれているこの図書館で働けて本当に良かったです。普段利用されていない方はぜひ利用してみてください。1年間、お世話になりました。

図書館職員のバイトをして

電子工学科4年

諏訪 久美子

私は図書館職員のバイトをして、たくさんのお話を学ぶことができました。このバイトは、放課後の2、3時間の短い時間ですが、私にとって非常に有意義な時間でした。

まず、4年生になってこのバイトを始めてから、本を読む時間が増えました。図書館で働くので、当然本を手にする機会が増え、新しい本や人気のある本、ベストセラーになっている本など、たくさんのお話を聞き、それらを読むことができました。学年が上がるにつれて忙しくなり、本を読む時間が少なくなりますが、バイトの時間で本にふれあえたのはとてもよかったと思います。

また、図書館の職員の方々いろいろなお話がで

きて、ためになりました。業務は、本の貸し出しや返却の作業や館内の清掃などでした。仕事の内容自体は難しいものではなかったですが、最初のころは少し緊張しました。慣れてくると仕事をスムーズにこなせるようになり、本の場所や蔵書検索もできるようになりました。

図書館に来る学生の人たちが、どんな本を読んでいるとか、今どんな本を読みたいと思っているかも分かり、日々発見がありました。

短い時間でこれだけのことを学べるバイトはなかなかないと思います。

1年間でしたが、たくさんの方にお世話になりました。本当にありがとうございました。これからも図書館を利用したいと思います。

みなさんも、どんどん図書館に行ってみてください。きっと多くの発見があると思います。

図書館勤務を通して

情報工学科4年

野口 裕華子

図書館で働いてみて良かったと思ったことは幾つもありました。

まず、カウンターという場所で過ごせることは、私にはとても魅力的なことでした。カウンターでは、本の貸出し、返却などの仕事を行います。それ以外の時間は自分の時間として有効に使うことができます。家や寮に帰ると、どうしても他のことに気が散ってしまいがちな勉強も効率よくこなせる上、読書にも勤しめます。また、ノートパソコンを持参してレポートを作成することも可能でした。

次に、図書検索システムを自由に利用できることです。そのため、当番の日にリストを持ってきて調べたいだけ調べることが出来ました。図書館の職員の方に検索して頂くにしても、同時に何冊もというわけにはいかないのと、とても重宝しています。図書検索システムは、貸出し中であるとか、どの辺りに在るか分かるので、今までのように探し回らずとも良くなりました。

他にも、図書館のお仕事はだいたい週1のペースで回ってくるので、自身の図書貸出しの延滞防止にもなったように思います。ブックハンティングの子

定も把握しやすいです。また、図書館の職員の方に顔を覚えて頂き、親しくなれることも喜ばしいことでした。働く中で良くして頂き楽しく過ごすことが出来ました。

働くことを学ぶというより、図書館に親しむことができる場であるように思います。大変なことはないので、次の4年生の方で興味をお持ちの方は、是非始めてみては如何でしょうか。

私自身これからも図書館の利用を続け、そしてより多くの方に利用して頂けることを願っています。

図書館勤務の感想

情報工学科4年

福山 恵理

私はこの一年間、図書館の受付業務をさせていただきました。

その中で、忙しい学生生活の中で忘れていた、本を読む楽しさを再び感じる事が出来ました。

入学してから学年があがるにつれ、図書館による機会も減り、三年次は本を読むことがほとんどありませんでした。四年次で受付業務をさせていただいたことにより、私はたくさんの本を手にとる事になりました。その中で自然と本を読みはじめ、本とは素晴らしいものであり、多くのことを考えさせられ、また、新しい知識を吸収することも出来るということが分かりました。そのことを再び実感できたことを嬉しく思っています。

また、カウンター越しに多くの来館者と触れ合うことが出来たのもいい経験だったと思います。図書館が多くの人に必要とされ、また、常に利用されているということを肌で感じる事ができました。

私がカウンター内で業務をするのは一年間だけでしたが、この先も図書館を利用していきたいと思います。そして、多くの本を読み、感受性をもっと豊かにして人生をより実りのあるものとしていきたいです。最後に、本を余り読んだことのない人も、ぜひ図書館に足を運び読書する楽しさを感じていただければと思います。



第32回 校内読書感想文コンクール!

本年度の校内読書感想文・作文コンクールを行い、下記の作品が入賞となりました。
来年度も校内コンクールを実施予定です。たくさんの応募をお待ちしております。



選考結果及び作品紹介

読書感想文

区 分	作 品 名	学年組	氏 名
最優秀作	この広い青い空の何処かで～「傷ついた画布の物語」を読んで～	1年1組	田 中 雅
優秀作	檸檬	2年1組	森 田 綾 子
優秀作	芥川の芸術	2年1組	山 下 涉 亨
優秀作	蟹工船	2年4組	田 中 亨
佳 作	『知識の扉』－「向き合うということ」－	1年1組	立 山 千 晃
佳 作	『知識の扉』－「機械化と体験」－	1年1組	西牟田 直
佳 作	『もの食う人びと』－「食うとは」－	1年1組	餅 井 亮 介
佳 作	「真似する力」を読んで	1年2組	工 藤 愛 美
佳 作	『もの食う人びと』－食は人を成り立たせる要素－	1年2組	坂 本 大 貴
佳 作	「セイジ」を読んで	1年2組	田 中 愛 智
佳 作	美しい死 ～「納棺夫日記」を読んで～	1年3組	岩 尾 麻 衣
佳 作	「桃太郎」を読んで	2年1組	中 村 健 司 郎
佳 作	『博士の愛した数式』	2年2組	山 田 理 園
佳 作	人間失格	2年3組	久 世 美 聡
佳 作	約束	2年3組	松 田 千 春
佳 作	人間失格	2年4組	清 川 拓 哉



「あと5分、あと10分」最後まで自分が生きてきた証、命の灯を点そうと懸命に画布に向かう画学生達。この若者達の青春や夢や希望を奪ってしまった戦争。曾祖父を戦争により亡くしてしまった私には、この画学生達のどうすることもできない苦しい思いがとても他人事とは思えず、気が付いた時には、この本を手に取り無我夢中で読み始めていた。

私は今までの人生の中で、岐路に立たされた時や、何かの節目の時、必ず先祖の墓参りをする。先祖の墓石の前で、そっと目を閉じ心を無にし手を合わせていると、不思議と心が安らぎ答えが見出せるものなのだ。その時、先祖の墓石の近くにある海軍上等兵碑にも必ず手を合わせる。これは、両親共々習慣となっているのだが、その碑には、親族の若くしてこの世に想いを残したまま散っていった曾祖父に対する熱き想いが込められているのだ。

誰もが夢や希望を持ちながらも、戦争に反対することも許されず、戦死することが名誉だ、と信じさせられていた時代。私の曾祖父も時代の流れに逆らえず、愛する妻や子供達を残したまま戦地に旅立ったのだ。その時、祖父は小学生だった。父を誰よりも慕い、父のような逞しい男になることを夢見ていたという。だが、悲しいことに彼が愛する妻や子供達と再会することは決してなかった。海軍の兵士だった曾祖父が所属していた艦隊は、東シナ海を進攻中、敵の艦隊の攻撃を受け大破した。勿論、彼の遺骨は戻ってこなかった。暗い海の奥底に艦共々沈んでしまった。出征する前に家族に残した毛髪と爪だけが唯一、彼の遺品となった。父の死の知らせを聞いた祖父は、悲しみと怒りで身体が震えるのを憶えたが、声に出して泣くこともできず、名誉の戦死、と誇りに思わなければならなかった自分を恨めしく思ったそうだ。若くして命の灯を消されてしまった曾祖父。父が戦死したことにより、貧しい生活を強いられることとなった祖父。満足に学校に通うことも出来ず、学びたくても、彼を取り巻く環

境がそれを許さず、働くことを余儀なくされた。彼も戦争の犠牲者となってしまった。戦争からは何も生まれない。生まれるとしたら、ただ強制的に夢半ばで人生を捨てなければならなかった、という犠牲だけだ。戦争の犠牲者となった祖父は、当時のことをあまり話したがらなかった。人はあまりにも耐え難い経験をすると、そのことを記憶から消し去りたくなるようだ。祖父は、自分の心の中にある戦争という記憶を頑丈な蓋をして生きてきた。しかし、その祖父が記憶の蓋を開けたのだ。そのきっかけとなったのが、初孫である私の誕生だ。私の誕生により、祖父はもう一度自分の生い立ちを含めた家族というものを考えてみるようになった。その手始めに、家族で鹿児島知覧特攻平和会館を訪れた。まだ幼かった私は、この平和会館に全く興味がなく、意味も分からず平和の鐘を何度も突き、母から大目玉を喰らったものだ。建物の中には特攻隊員達の遺品や関係資料が、所狭しと展示されていた。その中でも、祖父母や両親の目を釘付けにしたものは、彼等が家族や恋人に宛てて書いた遺言だった。決して帰ることはない機を操り、家族や恋人に思いを馳せ知覧を飛び立っていった特攻隊員達。機首を開聞岳に向け、一周し南海の空に消えていったという。彼等の残していった遺書は、祖父母や両親の心を動かし、いつのまにか瞳からはとめどなく涙が溢れていた。その涙を拭うことさえ忘れ、ただひたすら遺書に向かう祖父母と両親を見て、私は幼いながらも、今の豊かな時代に生きていられることに感謝した。この写真の微笑む若者達は、生きたくても生きられなかったのだ。ただ愛する人達を守るためだけに飛び立っていったのだ。

鹿児島から帰ってからの祖父は、今まであまり語られなかった自分が経験したあの時代の辛さや痛みを少しずつ私に話してくれるようになった。きっとそれは、この豊かな現在でも世界中で起きている不条理な戦争や差別を耳にし、あの時代に死んでいった曾祖父や特攻隊員達は、決して無駄死にではなく、彼等はあくまでも「愛する人達を守るため」「戦争をやめさせるため」そして何より「平和のため」に戦ったのだ、と後世に語り継ぎたいのだと思うのだ。今の日本が平和でいられるのは、彼等の犠牲の上に成り立ち、私達はもっとそのことを知るべきで、日本人として誇りを持つべきだと思うのだ。

私はこの本を通じて、改めて曾祖父の偉大さを知り、父を亡くしても明るく前向きに生きてきてくれた祖父を誇りに思い、彼等が生きてきてくれたからこそ今の私があるのだと心に刻み、この広い青い空のどこかで私を見守ってくれている曾祖父に恥じない様、一瞬一瞬を大切に生きていこうと思う。



不透明で奇妙な得体の知れぬ物体が心を渦巻く。そして、その不透明な物の中身を知らない事が気持ち悪くてどうしようもなくなる。誰でも一度はそんな経験をした事があるのではないだろうか。「檸檬」は、そんな気持ちを積もらせた「私」が、檸檬を爆弾に見立ててその気持ちを吹き飛ばす話である。これだけを聞くと明るい話に思えるが、鬱々とした気持ちで終始読んだという人も多いようだ。人間の感情の変化を繊細に描いた良い作品だと思う。しかし、私が檸檬を読んだ直後に感じたものはそんな簡単に一文で言えるものじゃない。

「私」は、お気に入りの果物屋で檸檬を買うと、今まで心を占めていた不吉な塊が檸檬に吸収されたかのように無くなっていく。鮮やかで、単純なレモンイエローが手の平にすっぽりと収まるのだ。そして心地よい冷たさと重さが手に伝わってくる。そこでじわじわと心が晴れやかになる気持ちは分かる。しかしこの場面、よく読むと奇妙な恐怖感に襲われるのは私だけだろうか。作中に書いてある通り、檸檬は紡錘形である。紡錘形の物で他に私が思いついた物の一つに手榴弾が挙げられる。心地よい冷たさと、「私」の「つまりはこの重さなんだな」という思考。そして最後に文房具屋の丸善で檸檬を画集の上に置いた後の、爆発すればいいという妄想。そう、檸檬を手榴弾と置き換えると、ぴったりその位置にはまってしまうのである。しかしこれはあくまで檸檬。でももしこれが手榴弾だとしたら？ そう考えると怖い。「私」は赤や青等の画集を積み上げてその上に檸檬を置いた。その光景を思い浮かべてほし

い。一種の芸術的な美しさを感じられないだろうか。「私」はどうしようもない不安感から破壊衝動を生み出していた。その衝動を、理性を働かせて芸術へと変えたのだ。「私」は器用にこれをやりこなした。しかし他の人間はどうなのだろうか。得体の知れない不吉な塊が心を渦巻いた時、どうするのだろうか。体を動かしてみたり、趣味の事をやってみたり出来る人は良いと思う。でも、もしその人に何も無かったら、発散出来る事が無かったらどうなるのだろうか。「私」は、以前好んで画集を見ていたという事から、元々芸術を楽しめる質^{たち}だったのだらうと思う。しかし、特に興味のあるものが無いという人も世の中には存在する。そうしたら、本当に物体を破壊する事でしか発散できないのではないだろうか。この考えに行き着いた時、私はある出来事を思い出した。

私は今夢中になれるものがあるが、元々は無趣味であった。特に夢中になれることも無く、好きなこともその日の気分でころころ変わる様な、そんな人間。友達は多かったけれど、広く浅くという様な付き合いで、一番身近にいる友達とは問われても答えることが出来なかった。その様な感じで日々を過ごしていたものだから、ちょっとした苦痛が溜まっていっても何処で発散すればいいのか分からなかった。ある時、クラス内で集団シカトが始まった。どこでもある様な、特に因縁は無いがクラスで目立っている人を無視するというものだ。そのターゲットになってしまった訳だが、皆飽きたら止めるだろうと思い、私はそこまで苦痛ではなかった。その様子がいけなかったのだと思う。集団シカトは発展し、靴や持ち物などがゴミ箱に捨てられたりした。そうなくても誰も頼る事が出来ず苛々とした気持ちだけが積もっていき、母からちょっとしたことで注意を受けた時に爆発してしまった。洗濯機を凹ませる程蹴り、風呂の側面を破壊し、大好きだった縫いぐるみを引き千切った。

今思い出すと笑えるのだが、当時は必死だった。あの時、何とも言い難い鬱々とした気持ちが積もる前に、何かで発散出来ていたらあんな行動はしなかったらうと思う。そして、破壊衝動の矛先が「モノ」でよかった、とも。もし人間へと向いてしまったら、私はちょっとした前科持ちになってしまうところだった。

最近は殺人犯の動機でも苛々したから等というも

のが珍しくなくなってきた。檸檬を読んで、感じた。ちょっとした不安感でも、積もって爆発する。それを理性でコントロール出来るか、出来ないかが一般人と殺人犯の違いなのだ。そう、たったそれだけの違いなのだ。一步間違えれば誰でも殺人犯になれる。しかし、逆を取れば一步さえ間違えなければ殺人犯にはならないということだ。その一步を踏み分けるのが、ストレスの大小だと思う。自分のストレスを他人にぶつけることは、きちんと自分をコントロール出来ない人間のやることだ。誰でもそうなる可能性はある。だが、積もっていく前に自分で発散させておくことで、破壊衝動の対象となった誰かを助ける事が出来る。その力を身につけてほしい。檸檬の「私」の様。



私はこの春先に地獄変を読んだ。この小説は日本を代表する文豪、芥川龍之介の作品の一つで、芸術至上主義者の悲劇を描いた王朝物の代表作だ。

この物語を読んで私がまず驚いたのは、芥川の記事の、眼前に迫り、叫び声まで聞こえるようなリアルさだ。画家良秀の狂気の行動や、牛車が煌々と燃え上がる場面は、読み手にも小さな地獄を体感させるような表現の鋭さがある。読み終わった後でも、数々のシーンが心に焼き付き、離れない。このような真に迫る力のある物語は、一体どのようにして書き上げられたのだろうか。

芥川が書く物語には古典から構想を得た物が多い。例えば「羅生門」や「鼻」は「今昔物語集」を題材にしている。そしてこの「地獄変」もその内の一つで、これは「宇治拾遺物語」が基となっている。しかし地獄変の場合、全く別の物語と言ってもいいほど、その内容が芥川によって改変されている。材をとった「絵師良秀」は燃え上がる家を眺めて良秀が、「これで不動明王の炎の絵を上手く描くことができる」と狂喜するという非常に短い話だ。この短い物語を、芥川は巧みにアレンジし、全く新しい物

語にしてしまった。登場人物についても、地獄変の場合娘を大きく取り上げ、大殿や猿、語り手等の人物を新たに登場させ物語をさらに深いものにしている。その中でも良秀と渾名された猿は、ストーリーに深い関係がないにも関わらず独特な存在感を放ち、終盤では物語の悲劇性をさらに強める役割を担っている。

芥川は一体どのような思いでこの猿を登場させたのだろうか。私は、この猿を良秀と対の存在として主人公を際立たせるために登場させたのではないだろうか、と考える。良秀と対の存在、それは芸術にはほど遠い平々凡々な人間、もしくは芸術にとらわれ、人の心を失ってしまった良秀の良心。猿の良秀は、屋敷で娘と中睦まじく暮らしている。さらに屋敷の中では多くの人に愛され、可愛がられている。芸術を追いあまり周囲から狂人扱いされる良秀とは全く持って、対の存在であるといえる。さらに物語の終盤で、この猿は燃える牛車の中へ自ら飛び込み娘とともに焼死する、という最期を迎える。もし良秀に少しでも人の心が残っていたとしたらどうだろうか。猿と同じように燃える牛車に飛び込んでいたのではないか。この猿はいつしか良秀の心から捨て去られた、人間のそして父親としての良心の象徴ではなかったのだろうか。もし良秀に親としての心が少しでも残っていたとしたら、燃え上がる牛車から娘を救い出そうとしたのではないだろうか、と私は思った。

しかし、彼は芸術を選んだ。そして地獄変の屏風を完成させたのを最後に、良秀は自ら縊れ死ぬ。なぜ良秀はこのような結末を迎えたのだろうか。私は絵を完成させた時に人としての心、良心が蘇ったためだと思う。地獄変の屏風を完成させ、芸術という悪魔から解放された。その時初めて、たかだか芸術への野心や絵師としての誇りのために、最愛の娘を殺してしまったことに気付いたのだ。それは真に大切だったものが何か気付いた瞬間でもあっただろう。そしてそれが悔やまれてならず、自ら死ぬという最期を選んだのではないだろうか。

自ら命を絶つ、と言う結末はそのまま著者の芥川自身に重なることとなる。この自殺という最期も含めて、小説家の芥川と絵師の良秀はどこか似ているように私は思う。なぜなら、芥川もまた、良秀と同じく文学作品を生み出す芸術家であるからだ。もし

かしたら良秀の芸術に対する姿勢については、芥川自身を投影した姿だったのかもしれない。

主人公の自殺で幕が閉じられるという結末は、良秀が芸術を絶対的な価値観とする芸術至上主義の考えを持っていたことが所以である。この作品からも分かるように、芸術は時として「神」になることもあれば「悪魔」になることもある。例えば、良秀の描いた地獄変の屏風の完成度は神がかった領域にまで到達していたと思える。惨たらしい事件でさえ無かったことにしてしまうほどの美しさがあったのだ。しかし、その神がかった芸術の力や、美しさを求めるあまりに、良秀は芸術に潜む悪魔に魂を売り渡してしまったのである。とても常人には理解の及ばない、芸術家の誇りがこの作品には強く描かれている。

そんな人間たちの芸術の魂は、美術品として現代まで受け継がれてきた。そしてこれからも、私達は究極の美をどこまでも追究していくのだろう。芥川はこの物語を通し、人間が芸術とどう向き合い歩むべきかを伝えたかったのではないか。この作品には、良秀のような天才から凡人まで全ての人々が求める芸術や美、そしてそれに対する芥川の思いや教えが文章の全体に溢れている、と感じた。



「蟹工船」とは、国内プロレタリア文学の最高峰である書籍である。この本は、冒頭は「地獄さ行くんだで」という奇妙な台詞から始まる。蟹缶を製造する蟹工船の中で監督の浅川による過酷すぎる労働の強制と暴力が吹き荒れ、倒れる労働者が続出、誰もが朦朧としながら絶望の中で働き続けていく。ある日、とうとう船内に死者が出た。船内のまずしい食事や衛生環境が原因だったのだが、事故として処理されてしまう。やがて物語の後半に差し掛かり、遭難した主人公たちがロシア人に救出される。ロシア人と話す機会を得た主人公たちだが、そこで、「あなたたちも悪い」という批判を受け、変わるべきなのは社会のほうではなく、自分たち自身のほう

だと論される。夢や希望、やりたいことを実現するためには、今の状況を変えなければならないことに気づいた主人公たちは、船に戻った後、自分のやりたいことをやるために状況を打破すべく立ち上がる、という労働組合の根本的な思想であるユニオニズムについて考えさせられる本である。

「蟹工船」という職場は現代の日本人が見ると非現実的すぎると思うかもしれないが、日常的な感覚に介入していたため団結することの大切さについて思い知らされた。「自分のやりたいことをするために、自分たち一人ひとりで考え、行動すること」という、この本で何度も繰り返されるフレーズがある。誰かに指示されるから動くのではなく、自分の夢や希望を叶えるために自分の頭で思考し、実践する。当たり前のことだが、現代においてこのことができる人は非常に少ないと思う。今日、学生や労働者問わず、誰からの指示もなしに行動できる人というのはあまり見たことが無い。数十年前の作品でありながら、このフレーズは「自己責任」という意識のない現代の人々に対する問題提起となっていると思う。

この作品の主人公たちは、「一人ひとりで考え、行動する」という、自己責任論で考えているにもかかわらず、一人だけ抜け駆けしたりせずに、他の労働者たちと一致団結し、協力して現状に立ち向かっている。だが、実際はそんなことが可能なのだろうかとは私は思う。なぜなら、「蟹工船」の職場と現代の日本の職場はまったく違うからだ。たとえば、この本に登場する浅川という監督の存在だ。浅川は、仕事中に倒れるものには「仮病だろう」と言いがかりをつけ水をぶっかけ、麻縄で締め上げて見せしめしたりする鬼のような監督である。こうした憎まれる「絶対的な敵」は現代の職場にはほとんど存在しないと思う。職場の「暴力」とは、もっと陰湿に行われるため、誰と交渉してもいいのかも分からない、それが、私が現代の職場に対して抱いているイメージだ。むしろ、労働者たちが「蟹工船」という職場から脱出することができたのは、浅川という「わかりやすい敵」がいたからだと思う。もし、監督がわかりやすい敵ではなかったのなら、労働者たちは「蟹工船」という職場から脱出するという考えすら浮かばなかつただろう。もう一つ挙げるとすれば「蟹工船」という職場が閉鎖的な空間であるとい

う点である。この本に出てくる労働者たちは、数ヶ月間もの間、船の中という閉鎖的な空間のなかで生活しているため、同じ苦労を長期間ともにする労働者同士の間で連帯感が生まれている。だが、現代の日本の労働問題の最も象徴的な被害者とも呼ばれる日雇い派遣の人たちは、同じ苦労を長期間ともにするといった状況が生まれる、この本に登場する労働者たちとは逆の存在とも言える。日雇い派遣の人たちは、派遣先の都合で全国をあっちこちに回されるため、同じ職場に留まる、仲間意識の持てる人間などいるはずも無く、当然、ストライキなど起こせるはずも無い。上に挙げた例のどちらか一方でもかけていたら、主人公たちは、一致団結し、ストライキを成功させることなど不可能だっただろう。そういった点では、この作品の主人公たちは幸運だったと思う。私は、この本を読む前は、読者に対して労働問題に対する問題提起となっていた本だと思っていたが、「蟹工船」というあまりにも非現実的な空間は、現代社会で生活している人々にとっては受け入れがたいと考えていた。だが、この本が最終的に伝えたかったことは労働運動や労働問題に対する主義主張ではなく、労働運動を例に挙げ、労働者だけではなくどんな立場の人間も「悩んでいないで、行動する」ということが大切だということだと思う。



本を読み始めて、第一章の初めのページに「今日から、湯灌、納棺の仕事を始めることにした。」という文章がある。私には、それがどんな仕事で、何をしているのかまったく見当がつかなかった。本を読んでいくとだんだんとわかってきた。それは、ひとの「死」に関わる仕事だそう。そして、その仕事の内容に私はとても驚いた。

この本は、著者の青木新門の書いていた日記より生まれたもので、その内容は、青木新門が経営していた飲食店が倒産してしまい、息子のため新聞の求人広告で見た、冠婚葬祭会社に就職する。そして、

死体をアルコールで拭き、仏衣を着せ、髪や顔を整え、手を組ませ数珠を持たせ、納棺するという湯灌、納棺の仕事を始めた。しかし、世間からは、差別をされていたし、社会的地位の低い仕事とみなされている仕事であったため、叔父から罵られることもあった。しかし、ある出来事をきっかけに「死」に対する考え方や、仕事に対する思いがかわっていく。

私が読んでいてなにも驚いたかということ、湯灌、納棺の作業だ。私ならたとえ知り合いでも出来ないことだと思ったからだ。そして、動かない人相手だと考えると、とても大変な作業だと思い、それをしている青木さんはすごいと思った。また、青木さんは死体相手に怖くなかったのだろうか疑問に思った。なぜなら、私は今でも、戦争で犠牲になった人々の写真や映画などを直視することができないからだ。それではいけないと思うのだが、そのすさまじさやむごさから、人の「死」をどうしても受け入れることができないのだ。そもそも、どうして「死」に対して嫌悪のようなものを感じてしまうのだろうか。それを、この本をとおして考えていくことで、いままで目を逸らしてきたことを深く見つめ返す良いチャンスになるとのではないかと私は考えた。

なぜ、「死」にいやなイメージを持つのか考えてみると、「死」からあまり良くないイメージを持つからではないかと私は考えた。多分そんなイメージのせいで差別がおこったりするのだろう。

そして、そんなある日、青木さんに仕事が入る。そして、その作業の間ずっとその死体の娘に当たる人が、青木さんの顔の汗を拭き続けたそう。それは、青木さんの仕事に対する思いを変えるきっかけになる。彼女に軽蔑も同情もなかったからこそ、青木さんにそう思わせたのだろう。青木さんの心が変わったことで、行動も変わった。その結果、周囲の見方も変わったそう。そのおかげで青木さんは今まで気がつかなかったことに気づく。それは、物事の本質から目を逸らしてはいけないということだ。青木さんは、「死」と向かい合うことで、周りからの見方が変わったように、お金になるからという考えでは、どんな仕事でも世間から軽蔑され続けるということに気づくのだ。それはとても大切なことだ。中学の時、部活動の先輩と喧嘩をした。原因は先輩方とちゃんと向き合おうとせず、言いたいことがあっても言わず、噂などだけで物事を決めつけ、

話し合ったりしようとしなかったからだ。その時先生から、「無関心が一番いけないことだ」と怒られたことがあった。無関心では何も分かり合えないし、相手に何も伝わらないからいけないのだと私は考えた。みんなが知っている当たり前のことだが、当たり前すぎてそのことに気づくことができなかつたのだ。その先生のおかげで、大切なことに気づくことができ、先輩方と仲直りをするのができた。いやなことから目を逸らし、向き合おうとしないことで、喧嘩が起ってしまった。そんなことで喧嘩が起きてしまうのだから、向き合うということは、生きていく上で大切なのだ。

また、青木さんが、仕事のためお棺を持っていくと、死体から蛆が湧いていた。とても異様な光景だっただろう。しかし、その蛆を掃き集めている途中に蛆が必至に逃げていることに気づき、蛆も生命だと思ふと光って見えたそう。青木さんは、「死」と向かい合うことで「生」の美しさや輝きに気づくのである。これは、現代の世の中に消えつつある感性だと思ふ。今の日本は豊かになったがその反面、他の生き物を殺し、その命をいただいて生きていることを忘れてるように思える。そのせいか、食べ物の好き嫌いをしたり、人の命を簡単に奪ったりする。もう一度、わたしたちは、私たちの根本にある「生」の大切さについて考え直す必要があるのではないだろうか。

この本を読んだことは、今まで目をそむけていたことに目を向ける良いきっかけとなった。この本から学んだことを毎日に生かしたい。そして、人はみな、いつかは死んでしまうということにちゃんと向き合い、毎日が無駄にしないよう精一杯生きたい。そして、生きる事、死ぬ事についてももう一度考えなおし、いやなこと、見たくないものから眼を逸らさずちゃんと向き合っていきたいと思った。



リアルな体験が大事であること。それは様々な面

からうかがうことができる。

例えば、古くから人々に言いならわされたことわざに「習うより慣れよ」という言葉がある。これは、物事は、人に教わるよりも自分で直接体験していく方が技術が身につくという意味の言葉である。なぜ、このようなことわざが今に残っているのか。それは、昔から、体験するということが大切にされていたからだろう。自転車を例に挙げてみても、「習う」つまり、自転車の原理を理解して、どのようにペダルを漕ぎ、どのようにして、ハンドルを握れば、車体を安定させたまま、速く進めるかを学ぶよりも、「慣れる。」つまり、実際に自転車に乗ってみて、感覚をつかむ方が早く乗れるようになるだろう。それは、実際に体験したからだろう。知ることとできることは違うのだ。知ったことを、そのまま行動につなぐことは難しい。それは、知って頭で理解することはできても、体が理解しきれていないからだろう。最初から自転車に乗ってみる方は、初めに、頭ではなく、体で理解している。そのため、すぐに乗ることができるのだ。つまり、これは、リアルな体験が大事であることをものがたっているだろう。

本文で筆者は、電子化がすすんでいること、また、それに伴い、リアルな体験をする機会が少なくなっていることを述べている。例えば、「本を読む」という体験では、電子化の影響で、電子の本が登場して、それによって、本を読むためにする「開く」という行為が、「ダウンロード」という形にかわりつつあるということ述べている。

このことについて、筆者は、反対しているのだ。本には、「厚み」があるのに対して、電子の本には、「厚み」がない。また、本を指先で触る「感触」があるのに、電子の本では、それもない。電子化された本に、パルプを使うことは、ないが、電子の本は、電気がなければ存在しない。

つまり、これまでわたしたちが、慣れ親しんできた、モノとしての本の属性が失われつつあると述べている。本だけでなく、手紙が携帯電話の登場により、メールへと変化しているのも電子化の影響である。

また、世界でも、教師が子供たちに最初にさせるのは、インクとペンで紙に文字を書くことだと述べている。電子の力で、楽をするのではなく、実体験することが大切だと述べている。文字を書く上で大

切な、ペンの角度、筆圧や視線の集中。また、文字を書くことで生まれるインクの染み、汚れ。それらの試行錯誤の末、生まれるのが文字だと述べている。

つまり、リアルな体験が大切なのは、電子に頼らないことで、自立することができるからということもあるがそれ以上に大切なのは、一つの物事をするときに起きる出来事が大事だといっているのだ。その出来事から新たな発見をすることができるかもしれないからだ。

今日、私たちの生活は大きく崩れ始めている。食事の面では、インスタント食品などを食べ偏ったエネルギーを摂っている一方で、足りないエネルギーをサプリメントで補給する。運動の面では、リモコンだらけの生活で何をするにも動かずにリモコンを使う。しかし、その一方では、お金を払いスポーツジムに通う。機械化により生活が崩れ始めている。

しかし、機械化されていくことが本当に私たちにとって良くないことなのだろうか。機械によって私たちは楽をして、その結果能力が低下してきている。

私たちは、機械を使うことで自由な時間を手にすることができる。家電製品が普及してきた時代に女性の社会進出が増えたのも、自由な時間を手にすることができたからだ。機械によって得た自由な時間を私たちは、有意義に使うべきだと思う。機械で、することができなくなっている体験を、自由な時間を使って行うのだ。いくら機械が発達したとはいえ、体験することによってしか得られないものがあるだろう。「手紙を書く」という行動もその一例だ。筆者が本文で取り上げている「本を読む」という行動も、体験だと「ページ」をめくる楽しみがあるのに、電子の本ではそれを体験することはできない。電子で「本を読む」ということは再現できても、その行為によって生じる感情などは再現できないのだ。機械で物事をするのが当たり前になっている今、わざわざ面倒なことをするのは嫌だと感じるかもしれない。

しかし、実際に体験をすることでしか経験できないことがたくさんある。

私たちは、機械が進むにつれて実体験をすることを忘れようとしている。再度、原点に立って体験することがいかに大切であるかを見直すべきではないだろうか。



人にとって、「食う」という動作は、何なのだろう。僕に言わせれば、「食う」とは、人が生きていくために必要不可欠な行動であると思う。僕や僕の周りの考える世間一般の常識としての考えは、たぶんこうだろうと僕は思う。

しかし、それは、極々一部の人の考えであると、この本を読んで気づかされた。そして、それには、思うことがたくさんあった。

一つ目は、残飯を食うである。残飯という言葉についての僕の知識は、「残った食べ物で人は食べない。そして、それは家畜の飼料になる」である。しかし、この本では、「人が食べる物」である。僕は目を疑った。しかし、その本の中で残飯とは、貧しい人たちの唯一の食事だった。そして、それは、「食う」という動作であり、命がけの動作でもあった。僕の頭の中は疑問でいっぱいだった。というか、そもそも、「食う」という動作は、命がけでやるものではないと思っていた。なので、このことを知った時、僕は「では、僕たちが毎日なにげなくやっている食うは、この残飯を食うとは、同じ必要性があるが、食うという動作のかこくさが違いすぎる」と思った。同じ食うでも、意味としては天と地ほどの差があると思った。

二つ目は、食うときに感じる味である。味とは、甘い・苦い・辛いなど、「食う」という動作を行う時に感じるものだと僕は思う。そのなかで、祖先から大事に大事に受け継がれてきた味がある。たしかに、その味は大事である。しかし、その味が無くなってしまったとき、人はどうするだろうか。僕は、たとえ、その味が無くなったとしても、「食う」はすると思っていた。しかし、この本の人々は、「他の味を食うのは、受け継がれてきた味を捨てるようなもの」と思って、「食う」という動作を行いません。つまり、ここの人々は、「食う」という命を守ることよりも、「味」という受け継がれてきた物を守ることを選んでいる。ここでは、味の方が食うよ

りも重いと思った。

三つ目は、食うと社会の関係性である。そもそも、食うと社会の共通点は何だろうか。僕は、変化し続けているところだと思う。そこを利用して、この本では、食うと社会の変化がどれほどみっせつか証明してあります。例えば、人々が店で食う時間が短ければ短いほど、いそがしく、長ければ長いほど、ひまでゆっくりしている。とか、料理する機器が高性能であれば社会の機械工業の発達、外国の食べ物が食べられるほど、国際的な社会、などということである。つまり、食うの変化は社会の変化である、僕は思う。

四つ目は、食うの意義である。食うという動作は、自分自身が生きるため、命を守るために行っている、と僕は思う。そして、それが食うという動作の最終的にたどりつく答えだと思っていた。しかし、この本の中では、「快樂のための食事は罪、神の御許に近づくためにそれを避ける。」と人々は思っていた。自分の命を守り生存することも大事だが、神の御許に近づくことの方が大事。つまり、ここの人々の食うの意義は後の考えの方でした。自己より神を大事にしていると思った。

五つ目は、食うと連なりである。人は、一人ひとり生活をする場所は違い、それにより、文化は違う、言語も違う。当然、食う時のさほうやマナーも違う。はしを使う者もいれば、手を使う者もいる。しかし、この本のまったく文化などが違う人々が、一つの店の中で食うを行っていた。僕は驚いた。こうも違う人々が、食うという動作をいっしょに行っている。人によれば、豚を食べることができない者もいれば、肉類全部を食べることができない者もいる。なのに、なぜこうもうまく人々が一つ食うという動作を行えるのか。そして、その疑問に対して、この本では、「食う人々には、身分も宗教も政治も関係なく、食うという動作をただ、楽しく行っている。だから、何事もない」と書いてあった。僕は、「食う」で、世界の人々が共存できるのではないか。話し合いよりも、戦争よりもうまくできると思った。

この五つのことをふまえて、僕は、「食うという動作は、人それぞれ考え方や意義は違い、それにより、食うの重さも違っている。でも、それらは違っている、食うという動作をしたいという気持ちは、

それぞれが持っていた。そして、それを理解することで、食うという一つの事で、全ての人が共存できる。」と思った。「食う」それは、全ての人が幸福になれる、良い手段になり、世界平和に貢献できるのではないだろうか。



私は、今考えてみると、新しいことを始めるとき、無意識に先輩や、同じような活動をしている人を真似していたと思う。

例えば、私は中学校時代、バスケットボール部の初代キャプテンを任された。中学1年までクラブチームで活動していたため、部活動での行動で戸惑うこともいくつかあった。しかし、無意識のうちにクラブチームでキャプテンをされていた先輩がしていたとおりに行動していたように思う。初めて他の学校と対外試合するときなどでは、相手チームのキャプテンが対戦相手の選手や監督や指導者へのあいさつをどんな風にされているのか、観察して、同じ様に行っていたように思う。また、生徒会活動での学級委員長として活動する際は、前の委員長の委員会の進め方や、残していただいた企画書や行動記録を参考にしてきた。真似している意識はなかったけど、無意識に真似するという行動をしていた。この本を読むと、私がとってきた行動の原点は、真似するという行為から始まっていたと気付かされた。私も何かを、誰かを見て、お手本にし、それを自分のものにしながら成長してきた。無意識のうちに、「真似」をしてきたのだ。これまで、意識もせずに行ってきた「真似」を意識的に習慣として持つことが出来るか「真似する力」を高めることが今後の私の課題だと思った。

この本の中で、印象に残ったのは、まず、「仕事ができる人は、最初に解答をみる」というところだ。昔、私は兄にこれと似たようなことを言われた。私が問題集を解いているとき、どうしても解けない問題があった。そのときは、あきらめて解けなかったが、兄に「難しいなら1回答えを見て、納得してか

ら解け」というアドバイスを貰った。その方法を使ったところ次のときには簡単に解けるようになっていた。答えを見て納得して解くことにより、時間も短縮することができるため、問題の解く量も増え、解ける幅も広がると思った。答えを導き出すプロセスを知った上で、次の問題にチャレンジできる安心感のようなものを得ることが出来ていた気がする。

次に印象に残ったのは、「いい部分を集めると、ベストの商品になる」ということだ。短期間で実力をあげるには、いいところ取りをする意識で、部分部分に注目することが大切だと筆者も述べている。確かに、人には得意分野や苦手分野がある。中学時代に所属していたチームでも、得意不得意がチームメイトそれぞれにあった。私はあまり器用ではないから、得意な子のように動くことが出来なかった。しかし、練習中みんなの動きを集中して見るようになってから、格段に上手くなったように思う。また筆者は「手本は、まず『半径3メートル以内』から探せ」とも述べている。確かに、違うポジションをしていたコーチよりも、同じポジションをしていたコーチのほうが、注意するところなども詳しく聞けるから、上達する近道に思える。身近に良いお手本や目標がないかを意識して「真似」をすることが自分を高めることにつながると思った。

次に印象に残ったのは、『真似する』コツ』という部分の「すぐにやる」だ。どんなに問題解決の解答を知っていても、身近に良いお手本や目標とする人を見つけていても、自分が「真似する」行動に移さないと自分のものにはならないし、ましてや成功に結びつけることは出来ないということだ。これまでの自分を振り返ってみても、憧れる先輩や友達がいっても、真似することが出来ていないことのほうが多かったように思う。「真似」が「モノマネ」で終わっていたことが多かったとも思う。「真似」を「モノマネ」で終らせないように、自分の脳を、「真似する」モードにしていきたいと思う。

この本を読んで、自分が、新たな行動を起こすとき、新しい問題に取り組むとき、これまでは、意識せずに「真似する」ことからスタートしてきたことを知った。自分自身が成長するとき、「モノマネ」で終らせることなく「真似する力」を高めて、自分なりの方法で、成功を挙げられるよう努力したい。これからは、「真似をする」7つのポイント①「見

栄」と「外見」はさっさと捨てる。②「オリジナル」に敬意を表す。③「キモの部分」だけを真似する。④異業種の人に会う、本を読む。⑤「わたしならどうするか」を口癖に。⑥嫌なヤツの「いいところ」を認めてみる。⑦すぐにやる！を実践していきたい。

この本は、社会人に向けて書いてあったが、これから高専で新しい学生生活を送っていく私が先生、先輩そして友達から、「真似する」対象を意識的に見出し、自分の成長につなげていくことのヒントになる本だった。この本との出会いを大切に頑張っていきたい。



日本は高度経済成長期から現在に至るまで先進国として成長してきた。それは生活環境や食料という面でも私たちを豊かにしてきたはずだ。そういう生活に慣れてきたのだ。だから学校やテレビで「先進国として成長してきた日本が発展途上国を支援していかなければなりません。」

「世界中にはストリートチルドレンは1億人以上いて、8億人以上が栄養失調で苦しんでいます。」

というような考えを押し付けられるようなことをいわれても可哀そうと感じる一方でどこか自分とは違う世界の話と軽く考えていた。

だから私がこの本を読んだときは衝撃を受けた。本書を読む前は世界の人々の食事についてかかっているのだと考えていたが、実際は食という事そのものから世界情勢などを考えさせられる文章だった。

著者が世界中を旅し、その土地の人々と出会い、食事を共にする。文字にするとどこか穏やかな空気を感じさせるが、現実には甘くない。そんな光景があるのだろうかと思うほど人の残酷さや叶えようのない希望がある。

今まで世界の食糧問題のことは知っていたのに深く考えるという事をせず、知らん振りをしていた自分に憤りを感じた。

世界中に宗教や民族などは星の数ほどあるが、その中身は千差万別であり、食文化でも然り。食文化の違いによる紛争が起きる事もあればそれを受け入れ、適応している地域もある。その違いは人々の置かれている状況と思う。戦争が起きたとき、敵国のものを食べようなどと思う人はいない。たとえいたとしても国が規制をするだろう。結果的に政府の役人の都合で始めた戦争が民衆を巻き込み、変えていく。生きるためだからこそ、人はどこまでも貪欲になれる。それはどんなところでも起こりえると思うのだ。

戦争は人を極限状態にし、食のタブーを犯してしまう事もある。本書中の『ミンダナオ島の食の悲劇』では人肉食が取り上げられている。私は本書でこの章が一番衝撃的だった。中国や東南アジアなどに出兵していたことは知っていても、その中身には触れていなかったのだと実感した。人は物事を知る事で自ら考え、行動する事ができると思う。共食いというのは、拒絶反応を起こす人もいることだろう。しかし、多くの日本人に知ってもらいたい事実である。

私は小さいころから食べるという事は娯楽のようなものだった。しかし世界には少量の食料だけで食いつなぎ、一日一日を過ごしている人がいる。そう知ったときには平等じゃないことに不思議さを感じた。世界の食料を平等に分ければ全ての人が十分に生活できる量はあるという。ではなぜ食糧問題は起こるのか。先進国の裕福な一部の人間が大量に食べ、大量に残すからである。外国には残飯の市場があるという。リサイクルの精神ではない。人が食べたもののあまりを人が食らう。まるでペットみたいだと感じ、なぜ余らせるのか、なぜ残飯を食べるのか、このことは私たちへの警鐘をならしている気がするのだ。

「食べる事はどういう事ですか」

と聞かれて、

「生きるために必要な事です。」

「慣れている私たちにはなんでもない。」

と答える人は少数派だろう。しかし、現実には残飯を食らう、汚染された食物もほかに食うものがないから食う、民族の食文化はあるが、自然環境の変化により文明のものを食べざるを得なくなる、そもそも食えない人がいる。知っていた事、知らなかった

事など様々だが、それについてしっかりと考えた事はなかったが、本書を読んでいると深く考えさせられた。この違いは、自発的なものかそうでないかによるものだと思う。

一人一人がなにを考えたとしても、大きな行動は起こせないだろう。しかし、一人一人が食の大切さについて深く考える機会ができたなら、食糧問題の解決への一歩を踏み出せると思うのだ。そんなこと無理だと思うのではなく、自分だけでもやっという力強い意思が大切だ。

人はものを食べることで生きている。その事自体は当たり前で、変わりようのないことだけど、食に対する人々の思いは変わらなければならないものだ。裕福な人の自己中心的な考えはもちろん、飢えで苦しんでいる人は現状に諦めてはいけないと思う。

私は人の気持ちを動かせるような人間になることから始めたい。私の周りの人に熱弁して考えを改めさせるのも悪くない。

そうすれば、より多くの人の意識を変えていけると私は信じている。



この「セイジ」という話は、大学の四回生である主人公が、夏休みに気まぐれで自転車旅行をしているときに偶然立ち寄った喫茶店の主人、セイジとその周りの人々との交流を描いたものです。主人公は風変わりなセイジの人柄に興味を持ち、しばらくの間、その喫茶店に滞在することになります。僕がこの「セイジ」を読み、考え、感じたことがいくつかあります。

まず第1に、【若さ】が持つ重要性和、それを自覚できていなかった自分への不安感についてです。この小説に、こんな文章があります。散歩にやってきた主人公とセイジが丘の上で近くの高校から聞こえてくる歌を耳にする場面です。—『二度と無い、この若き日を』—という歌詞を聴くと、セイジは—『……あのコ達が今歌ってる歌詞の、その本当の意

味を知るのは、これから十年、二十年が過ぎた頃なんだろうな……』—『…十年、二十年が過ぎて、その言葉の意味が分かりすぎるほどに分かった頃には、もう誰も、あの歌を、あんな澄んだ声で歌えやしないのさ』と言います。僕はこれを読み、ああ、これは僕にも当てはまることなのかな、と思いました。僕は中学二年生の頃、怠けるばかりの日々を送っていました。今思うと後悔の念が押し寄せますが、当時は何事にもやる気が起きず、部活が終わって帰ってきてはすぐに寝る、といった流れを繰り返していました。一年生の頃に上位だった成績は下がり、特に何かをするわけでもなく、ただただ寝てばかりいました。しかし一年経った今、「なぜ、一生にたった一度の中学二年生という時期を無駄にしてしまったのだろう」と、そのことを悔んでいます。まさに、セイジの言葉通りです。一年経っただけで後悔しているのですから、これから月日を経て、更に悔んでしまうでしょう。でも、これからはそれを少しでも減らせるよう、日々を充実させていきたいと思えます。完璧な人生を送ることは無理でも、自分の満足できる、人に誇れるような生き方をしていきたいと思えます。

第二に、生きるということはどのようなことだろうか、ということです。主人公が『生きる事を支える為に、人間はメシを喰ったり、喰うために働いたりするんじゃないですか?』と言いますが、それに対してセイジは、—『だけど、それは言ってみれば病院の生命維持装置みたいなものじゃないか?』『百年ながらえるより、一瞬でいいから俺は生きたいと思う事があるよ』—と言います。僕はまだ働いたことがないのでよく分かりませんが、セイジの言う【生きる】ということは、一般的な「生きる」とはちがうようです。では、【生きる】ということはどのようなことでしょうか。読む人によって考えは異なると思いますが、僕は、「心の底から喜んだり、悲しんだりすること」だと思います。単純な答えかもしれませんが、これはふだんの生活で味わうような気持ちではなく、それこそ自分の価値観などがひっくり返るような大きな心の変動だと思います。それを、できれば一生のうちに一度だけでも味わいたいと思えます。

第三に、主人公とセイジが、【人間は何の為に生きているのか】ということについて話していると、

セイジは『人間は、多かれ少なかれ、カナシイ思いをする為に生きてるんじゃないのか』『…人間はよ、カナシクなるほどに、色んな事に気がつくものさ。カナシくなりゃなるほど、色んなものがみえて来もする。』と言います。これを読み、僕は「なるほど」と思いました。前述とは矛盾しているかも知れませんが、確かに、カナシミから見つかるものはたくさんあります。失敗は成功の母ともいえますし、本当の喜びは相応の悲しさから生まれてくるものではないでしょうか。ただ成功するだけよりも、一度大きな失敗をしてからのほうが成功したときの喜びは大きいはずです。ですから、人間が生きることにおいてカナシイ思いをするということは、ある意味、喜ぶ事よりも重要であると考えられます。そして、そのカナシイ思いを経験する為には、楽な方ばかりへと逃げずに、困難なことを受け入れる気持ちが大事だと思います。そうすれば、よりおおきな喜びに出会えると思います。

このように、僕はこの「セイジ」という本を読むことで色んな事を学び、考えることができました。人としての生き方を、改めて見つめ直すことができました。もちろん、このほかにもこの本から得るのは多く在り、この本をよんで本当に良かったと思いました。ここで学んだ教訓をこれからの生活に生かして、よりよい人生にしていきたいと思えます。そして、この「セイジ」を、より多くの人に読んでもらい、何かを感じ取ってもらいたいと思っています。



その悲しい出来事は突然私の目の前に訪れました。近所に住んでいてとても親しくしていたおばちゃんが亡くなってしまったのです。子や孫もいなかったせいか、私のことを本当の孫のように接してくれ私も本当のおばあちゃんのように思っていました。小学校一年生のときから朝は必ず、「おはよー。」

と声をかけてから登校し、帰りには、
「ただいまー。」

と言って自分の家のごとく家にあがり込むのが私の日常でした。歓迎遠足やお別れ遠足のときも、家の鍵をいつもランドセルに入れていた私は忘れることがほとんどで、そんなときにも

「何時まででんウチにおってよかよ。」

と言ってお母さんが迎えにきてくれるまでひもじい思いはしていないかとお菓子をくれたり、寒くはないかと毛布をくれたりしてくれました。雨の日にはタオルも貸してくれました。私はその優しさに何度救われたかわかりません。そんなに優しくったおばちゃんが死んでしまうなんて私は想像もできませんでした。おばちゃんが亡くなったと聞いてからどこか心ここにあらずといった感じだった私もおばちゃんの最期の顔を見に通夜へ行きました。そこにはすでに親戚の方が集まっていて、その奥には白い物体が横たわっていました。それがおばちゃんだと気付くのにはそう時間はかかりませんでした。おばちゃんの前には正座をした私は何をすればいいのかとまどっていました。

「顔の布ばとってごらん。」

というおじちゃんの言葉にも私はとまどい、何故か布をどかすことができませんでした。もう一度言われ、恐る恐る布に手をかけてめくった私は驚きました。

「きれいな顔だな。」

心の中でそう呟くと同時にホロリと涙が私の頬を伝っていました。人の死に顔というのを初めて見た私はただ泣くことしかできませんでした。今思うと、きれいだなと思ったのは、——叔父は、いい仕事があるがと切り出し、話の中で、何代も続いた家柄の本家の長男が納棺夫になりさがつたことをなじったり、わが一族には教育者や警察など国家公務員も多く、社会的に地位のある人も多い、と言ったり、その一族の恥だと言ったりした。

そして最後に、今の仕事を辞めないのなら絶交すると言った。——

——友人たちが遠ざかっていったことが、寂しかった——

などのように、世間で嫌われているような職業の人たちが懸命な想いでやってくれたからだと思います。著者の青木新門さんは、

「社会通念を変えたければ、自分の心を変えればいいのだ。

心が変われば、行動が変わる。」

と決心し今までの自分を一新して納棺夫に徹されました。その一方でそういう職業につきながらも、——若い警察官などは、ゴム手袋をしたり、マスクをしてみたりするのだが、結局懐中電灯を照らしているだけで死体に触れる事なく終わってしまう。——

という人は多いと思います。そんなことでは、何の真相も見抜くことはできないと思います。私たちは、青木さんのような心持ちと行動力を真似していかなければならないのではないのでしょうか。

私は、『納棺夫日記』を読んで

「美しく死ぬとはどういうことか？」

ということを考えるようになりました。美しく死ぬとは、本のあとがきの中にある正岡子規の言葉のように

「悟りといふ事は如何なる場合にも平気で死ぬる事かと思っていたのは間違いで、悟りといふ事は如何なる場合にも平気で生きている事だった。」

だと私も強く思います。私は以前にもそのような言葉に出会いました。その言葉は、藤堂高虎の家訓で「寝室を出る時から、今日は死ぬ番であると心に決めなさい。その覚悟があればものに動ずることがない。」

という言葉です。一見違うようにも見えますが、どちらも、死ぬことに怖気付かずに自分の芯をしっかりと持って今できることを一生懸命頑張りなさいというメッセージが込められていると私は思います。時代の流れや周囲の流れに流されず、力強く精一杯生きていればいざという時も悔いはないものだと思います。

私は、『納棺夫日記』を読んで、何事も真正面から向き合うことが大事だということや何をするにもその真理を深く考えてから行動しなくてはいけないということを学びました。これらのことを自分の人生の糧にしてこれからも頑張っていきたいと思えます。



ふと、読書感想文と聞いて私は「桃太郎」を思い出した。記憶はおぼろげだが、たしか私は小学2、3年生の頃の読書感想文で今回のように「桃太郎」を書いた。あの頃は精神的にも幼稚というか未熟で、物事を深く考えないで行動していた時代だった。その時の文の内容も「なんで鬼は村を襲うのだろうか？や、桃太郎は鬼を退治できるなんて凄い」などの、お粗末なものだ。そして高校生になった今、もう一度「桃太郎」読み返してみた。すると、やはり、あのころとは違うものを感じた。だから今回は、高校生になった自分、成長した自分、あのころとは違う観点から見る「桃太郎」の感想文を書きたいと思う。

まず、「桃太郎」とは日本で最もポピュラーなおとぎ話である。日本で「桃太郎」を知らない人はまずいないだろう。作者は不明である。簡単な概要を説明すると、まず、むかしむかしにおじいさんとおばあさんがいて、仲良く暮らしていました。ある時、おばあさんが川で洗濯しているともものすっごい大きな桃が川から流れてきてそれを持って帰り、中を割ってみると、中から元気な男の子が誕生。子供のいないおじいさんとおばあさんはこの男の子を「桃太郎」と名付け、大事に育てる。桃太郎はスクスク成長した。しかし、その頃村では鬼がやりたい放題大暴れ、成長した桃太郎は鬼を退治することを決意。そして、両親から渡されたきび団子を腰につけ、出発し、犬やら雉やら猿やらを従えて鬼ヶ島に乗り込み鬼を殲滅。鬼ヶ島にあった宝物を持ち帰り村の人たちに配り最後は家に戻り、両親と共に幸せにくらす。という、勧善懲悪（ハッピーエンド）ストーリーの鉄板である。また、今述べたものが最もポピュラーな「桃太郎」の話だが、他にも様々な説がある。例えば、桃太郎は桃から生まれたのではなく、桃を食べたおじいさんとおばあさんが若返り、子供を産んだという説や、鬼退治を決意したのは自発的にしたのではなく、村人や殿様などに、「桃か

ら生まれた不気味な存在」として、強引に押し付けられしかたなく了承したという説、桃太郎は3年寝太郎のように力持ちで大きな体をもってはいるが寝てばかりだったというような様々でユニークな説も多々存在している。が、今回はこのような風説は無視し、先ほど述べた、ポピュラー「桃太郎」の感想を書こうと思う。

私が、桃太郎を読んで、「なんで、犬、雉、猿だったんだろう？」や、「犬、雉、猿に対するワイロがきび団子だけってどういうこと？」など、小さい疑問点は多数あったが、私がこの「桃太郎」の物語の中で、特に疑問に思い、深く考えたのは次の2点である。

まず、第1に「なぜ、桃でなくてはいけなかったのか」ということが私は疑問に思った。これについても様々な説があるが私はこう考える。私が「桃」から連想を広げた場合、どうしても最終的に仙人に辿りつく。仙人とは何か神秘的な力を感じるものがある。また、桃太郎が戦わなければいけないのは鬼である。鬼とは悪の象徴、すなわち普通の人では勝てない。だから、桃太郎は鬼に対抗するために何か力が必要である。その力こそさきほど述べた神秘的な力である。はたして、桃太郎がそんな力を持っていたかは謎だが、桃太郎に何か特別なものを感じさせる為には桃というアイテムが重要だったのだろう。私はそう考える。そして、2つ目は、「鬼退治」についてだ。悪さをする鬼たちを桃太郎が退治する。確かに勧善懲悪でハッピーエンドだ。が、しかし、この物語はあまりにも桃太郎達側を覇気目線で作られている。そう私は感じた。本には桃太郎は鬼たちを懲らしめた、や、退治したという表現が使っているが、実際には桃太郎は鬼たちを徹底的に惨殺した。その証拠として、桃太郎の歌がある。「(1番) 桃太郎さん、桃太郎さんお腰につけたきび団子… (5番) おもしろい、おもしろい、残らず鬼を攻め伏せて、分捕物をえんやらや…」というような、4、5番が過激な歌詞になっている。また、桃太郎は鬼たちを殺した後、そこにあった宝物を根こそぎ奪い村に配ったとされている。ここだけ聞けば、「宝物を分けてくれる桃太郎はなんていい奴なんだろう」と思うかもしれない。が、桃太郎は自分の家にも宝物を持ち帰っている。よくよく考えてみれば、桃太郎が行った行動は客観的にみると鬼を皆殺しにし宝を

根こそぎ奪ってきたのだ。先に悪さをしたのは鬼だがやっていることは鬼と同じかそれ以上だ。

このように、年をとったことでまた、違う視点で桃太郎の世界を感じることができた。考え方の違いでこうも違うように解釈することができることがわかった。昔に読んだ本を読み返してみるのも悪くはないと思った。



博士の愛した数式

つー、と一筋の滴が私の頬を伝う。瞼の奥がジーンと熱を帯びていくのを感じる。どうやら私は、泣いているようだ。

この『博士の愛した数式』という本は、記憶が80分しかもたない元数学者「博士」と、彼の元で家政婦として働く「私」、そしてその息子「ルート」たちのふれあいを、様々な数式と共に描いた作品である。

私は、数学という学問が苦手だ。二次元の世界で生きる数字や記号、図などはいつも私の頭の中を引っ掻き回す。また、苦勞して勉強した公式や様々な証明が将来、社会に出る私にとって役に立つものなのか、疑問である。確かに、基礎となる四則演算を始め、職業や自分の研究する分野によっては、数学を用いることもあるが、普通のサラリーマンにとっては、学生時代に学んだ「相似の証明」や「集合」は、ほぼ役に立っていないと言えるだろう。そんなことを考えると、私はなんだか阿保らしくなってくる。授業中、将来役に立つかもわからない図形の証明に対し、悶々と頭を抱える自分が。

しかし、今まで無表情であった数字たちに、博士が手を差し伸べるとたちまち、数字たちは呼吸を始め、まるで自分の存在をアピールするかのよう、私の頭の中を駆け回る。今まで、憎むべき相手だった数字に、何故だか神々しさや愛しさを感じてしまう。

「友愛数」というものをご存知だろうか。友愛数

とは「異なる2つの自然数の組で、自分自身を除いた約数の和が、互いに他方と等しくなるような数」である。作品の中に出てくる友愛数は、 $220 : 1 + 2 + 4 + 5 + 10 + 11 + 20 + 22 + 44 + 55 + 110 = 284$ 、 $284 = 1 + 2 + 4 + 71 + 142 = 220$ である。この美しさがわかるだろうか。自身の「約数」と「+」によって作り出された鎖は、迷うことなく他方の数字へと結ばれる。どんな数字の侵入も許さない彼らの絆はきっと、万や億、それ以上の数字をもっても敵うことはないだろう。220と284が私の知らないところで、こんなにも友愛を育てていただなんて、考えたこともなかった。220と284が友愛数と知った今、これらはもう、ただ無表情に立ち尽くす数字ではない。数え切れないほど存在する数字の中を彷徨う、2つの数字。たった一本繋がれた鎖だけを頼りに巡り巡って、ついに出会った彼らは、神に見守られながら共に永遠の友愛を誓い合ったのだ。なんと強固で美しい数字なのだろう。

こんなにも素晴らしい数字の世界について教えてくれた博士は、17年前、事故によって記憶が80分しかもたなくなってしまう。さて、「記憶が80分しかもたない」というのは、どのような気持ちなのだろうか。生憎、今まで人生を何不自由なく生きてきた私には、彼の気持ちなど到底理解できる筈がない。失うことを知らない私と、失うことばかりの博士では生きる世界も考えることも、感じることも違うのだ。博士の気持ちを理解することができない自分が、なんだか悔しくて、同時に申し訳なくも思った。積み上げた積み木が、80分という時間を越えてしまうと、徐々に下から崩れ落ちる。17年の間に会った人や楽しかったこと、悲しかったことが「0」になってしまう。

博士は「 $1 - 1 = 0$ 」の美しさを、梢にとまる小鳥で表現した。捉え方によっては、この簡素な式に美しさを見出すことができるかもしれない。しかし、80分の間に積み上げた「1」という積み木は、時間を越えてしまうと「 -1 」の悪魔によって持ち去られてしまう。そして、残るのは「0」。0は美しい数字だが、時に残酷で悲しい数字だと思った。

何故、彼のような数字の真の美しさを発見できる人が、失ってばかりの人生を歩かなければならないのだろうか。何故、子供に無償の愛を与えることのできる彼が、常に「0」を身に纏わなければなら

いのだろうか。神とはいつも平等で、不平等である。

人間は愚鈍で傲慢な生き物だ。生きるためにはどんな悪にも手を染め、生物の頂上に君臨していると思ひ込み、地球上を我が物顔で闊歩する姿は、正に愚鈍で傲慢だ。地球上で一番醜い生物と言っても、過言ではないだろう。しかし、この本を読むとそんな人間の中にも、博士のように優しさや謙虚さ、真の美しさを発見する力のある人間が、存在しているかもしれない、と微かな希望を抱く。もしかすると、人間もまだまだ捨てたものではないのかもしれない。

私の頬を伝った涙は、博士や「私」、ルートたちの陽だまりのような優しさを羨ましがった、愚鈍で傲慢で醜い私の心の叫びだったのかもしれない。そして、彼らに心から幸せになってほしい。そんな願いだったのかもしれない。



大庭葉蔵。それは太宰がこの作品の中に描いたもう一人の自分である。葉蔵の手記を借り、自身の生涯を極限まで綴っている。葉蔵が世の中、人々との関わりの中で抱く思い、そしてその中で生きる葉蔵の姿を著したこの本の世界に、私はページをめくる度に引き込まれていった。

葉蔵は幼い頃から過剰なまでの自意識により気を揉んでいた。自分と世の中の人々との幸福な観念が食い違っているような不安を抱き、不意に人間の恐ろしい正体を知り、いつも恐怖に震いおののいていた。嫌な事を嫌と言えず、人の顔色ばかりを窺い、従う事しか出来ずにいた。その不安と恐怖に襲われる日々から逃れたい、という思いから葉蔵が考え出したのは、道化だった。他人に笑われる道化を演じることでしか、人とつながることが出来なかったのだ。その後も彼の人間恐怖は変わることはなかったが、その中で道化を演じることは上達していった。

私は人は誰しもが何かしらの不安や恐怖を抱いているのではないと思う。この本で太宰は、自分一人全く変わっているような、不安と恐怖に襲われる

ばかりだと著している。この後に綴られている葉蔵の波乱な生涯は、彼の過剰な自意識と神経質さがより彼を不安と恐怖に怯えさせ、引き起こしたのではないかと思う。

絵を描く事が好きな葉蔵は、東京の高等学校に通いながら、画塾にも通った。そして、画塾で堀木という画学生に出会った。この上京から葉蔵の人生は変わり始めた。その後彼は、不安や恐怖、迷いを紛らわすために、酒や煙草、女、後にモルヒネに溺れるようになった。そして彼の生活は退廃していった。

私も辛い事や考えたくない事から逃れようと、別の事で気を紛らわすことがある。それらは人の弱さが引き起こすものだと思う。その弱さ故に彼はそれに溺れてしまったのではないかと思う。

葉蔵は堀木に連れられて行った大カフェで知り合った女給に初めて恋をした。そしてある時、女が初めて「死」という言葉を口にした。彼も世の中への恐怖、わずらわしさ、女、学業、考えるほどこの上でこらえて生きて行ける気がせず、その一言に気軽に同意した。二人は鎌倉の海に一緒に入水し、自殺を図った。しかし、死んだのは女給一人。葉蔵だけが助かり、それから一人だけ生きているショックから、以前より酒に溺れ、自己の破滅へと陥っていった。一人だけが助かるという辛い現実。愛する人を死なせてしまった彼の心の痛み、辛さを想像もできなかった。

その事件後、父の知り合いに引き取られたが、その後家を出て、堀木を訪ねた。そこで出版社の女と出会ったことで無名の漫画家として、酒と煙草の金を稼いでいた。しばらくは、その女と子供と暮らしたが、二人のつつましい幸福を今に自分が滅茶苦茶にしてしまうと思い、自ら二人から離れた。

それから行きつけのバーに泊まり込んだ。そんな葉蔵にも常連達は優しく接した。そして彼は世の中に対して、それほど恐ろしい所ではないと思うようになった。彼が怯えていた「人との関わり」がこの時「人との関わり」によって彼を少しでも変えたことに、人々の存在は貴いと感じた。

その後彼は、向かいの煙草屋の娘の、人を疑う事を知らない無垢な心に惹かれ、やがて二人は結婚し、穏やかな日々を過ごしていた。しかし、その無垢な信頼心により起こった悲惨な事件。妻を助ける事ができなかった彼の心には再び恐怖と不安が重く押し

掛かった。その後二人の間には辛く、冷たい空気が流れていた。そしてついに葉蔵は、仕事の能率を上げる為だと言い、モルヒネに溺れていった。

この本には、人間の弱さ、脆さにより、一人の人間が堕ちていく様子が綴ってある。私は人の心とはなんてはかないものだと感じた。

脳病院での静養中に自ら「人間、失格」と言った。そして東北の田舎で療養する事になり、酒や煙草、女、モルヒネに溺れ、堕ち果てた彼は手記にこう綴った。

「いま自分には、幸福も不幸ありません。ただ、一さいは過ぎて行きます。」

人間の弱さ、脆さ故に堕ち果て、自分で考え出した道化も財産も…すべてを失った彼に残ったのは過ぎゆく時間だけだった。しかし私は、全て失った葉蔵の真っ新たな心を美しいと感じた。

この本には、一人の人間の心に多くの不安や恐怖が隠れている。私は人の心ほど難解なものはないと思う。そして葉蔵のように世の中に対し、恐怖や不安を抱くこともある。この本を読んで、私は弱く、脆い心が人間の本質なのではないかと思った。だからこそ、人は人との関わりの中で、共に支え合いながら生きているのではないかと思う。



自分にとって大切なものとは何だろう。こんなにもなって人を助けることができるのであろうか。自分は何か物事を一生懸命にやりぬいたことがあるだろうか。私がこの約束という本を読んでの一番最初の感想である。カンタは大切な友人であるヨウジを自分の死と引き替えに守った。私は到底、自分には出来ないと思った。もしも自分がカンタだった場合一目散に逃げるだろう。友だちには申し訳ないと思いつつも知らない人かのような態度で逃げるだろう。結局は自分が一番なのだ。カンタのようにするのが理想だろうけど人間全てがなるとは限らない。いやむしろほんの数人だけだと思う。ほとんどの人は私

と同じような行動をするのだと思う。最近は何事か事件が多くなってきた。何かしらの事件、火事が起こると人は現場に集まってき、携帯で写真をとったり、何が起きたのかと近くの人と話し合ったりする。果たして、そんなことをしていいのだろうか。もしかしたら、人が死んでいるのかもしれない。まだ必死に生きているのかもしれない。そのような現場を写真でとるなんて間違っている。とったとしても、それをどうするのだろうか。友だちに見せるのであろうか。私も同じような行動をすると思う。私じゃなくて良かった。と他人事のように思うだけだろう。間違っている。約束を読んで自分の間違いに気付いた。自分の心の狭さに気付いた。でもカンタのようにはなれないと思う。だから私は自分なりに行動しようと思う。約束ではとおり魔事件だったが、いじめの現場も同じだと思う。もしいじめが目の前であったのなら、私は周りの人に助けを求めたり、先生や大人に言ったりと自分が出来る範囲の最善を尽くそうと思う。少しでも自分の力が役に立てればそれでいいと思う。カンタとヨウジのように信頼し合える友だちっていいなと思った。私もそんな関係の友だちを一人、二人と限らずたくさん作りたいと思った。

私には清人が両親に悪態をつくのが分かる気がする。自分の片足を失ったと仮定してみると、外に行くのも一苦労、サッカーをするにもバレーボールをするにも色々大変である。ちょっと動こうとすることも簡単に出来ることではない。そんな風になっていくと、ちょっとしたことでイラッと怒りが出ると思う。ストレスの発散のしようもなく、それで結局親にぶつけると思う。自分だったら確実にしている。清人は片足がないという障害を乗り越え、スカダイビングが出来るようになった。私は今弓道部に所属している。弓道が上手になりたいという目標も持っているにもかかわらず、中らなくなるとすぐにあきらめて練習を休んでいた。清人はあきらめなかった。清人はダイビングを通して、両親に感謝する気持ち、自分の出口を見つけることが出来た。私も清人のようにならなくてははいけないと思った。自分に弱い部分が多すぎるなと感じた。

雄太は小さいながらにたくさんのストレスを抱えてこんでしまって辛い思いをたくさんしたんだなと思った。今頃、早くに結婚し、子どもを産み、すぐ

離婚というケースが多い。悲惨なことに家庭内暴力も増えていると思う。子どもはどんなに辛いのか知ってるのだろうか。以前、母と父がけんかをした時があった。二人とも許す気配がなく、無言で意地の張り合いのように両者一步も引かなかった。その当時小学2年生だったが、このままけんかが続き、家族がバラバラになるのではと心配でたまらなかった。仲直りをしてもらいたくて、大泣きしたのを覚えている。たかが子どもだと思ってはいけないう。子どもは親をよく見ている。雄太も同じ気持ちだったと思う。晴彦は尚美たちと幸せに暮らそうと決意をしていった直後に亡くなった。高校1年生の時に勉強した、志賀直哉の城の崎にてで書いてあった「生きていることと死んでしまっていることと、それは両極ではなかった。それほど差はないような気がした。」という文に共感した。確かに尚美だって晴彦だって雄太だって亡くなるだなんて思っていなかったのに亡くなってしまったのだから。私だって明日生きているのか、1年後も勉強出来るのか分からない。そう考えると毎日毎日を大切に生きていくべきだと思った。感謝することがあったら、ありがとうと申し訳ないと思うことがあったら、ごめんなさいと素直に相手に伝えるべきだと思う。時間は限られている。その時間をどれだけ有効に使えるかが大事だ。雄太は耳という大事な五感の一つを失いかけたけど、そのおかげで家族、家族の温かみを手に入れて良かったと思った。辛いことがあっても家族や友だちの力で幸せになれるんだろう。私も「辛」が「幸」になれるその一本の人になりたい。



この太宰治の「人間失格」という小説は、太宰治が自伝に近い形で書いたものだそう。そして、小説の内容は、大庭葉蔵という男の少年時代からの半生が記してある手記が書かれてある。その葉蔵という男は、少年の頃から、自分の人生の生き甲斐を見出すことが出来ず、人間の怒りというものに恐怖し

ている。その後、葉蔵は次々と女性と関わり、睡眠薬中毒になってしまって、自殺未遂をくり返し、薬物におぼれていってしまう、というものである。この小説はたくさんのことを私に気付かせ考えさせてくれた。

この「人間失格」を書いた太宰治は、この小説を書き終わって1ヶ月後に、自殺して亡くなったそう。おそらく、太宰治は自分の死を意識して書きあげたのではないか。この小説の主人公の葉蔵を自分とみて書き、そのため、死にたいと言ったり、何度も死のうと決意するというを書いている。そして、自分は「人間失格」だと言って、死ぬために自分を追い詰めていたのではないだろうか。

それはそうだとすると、私は、葉蔵の奇妙な部分でもある、人間に対して大いに疑う気持ち、人間の怒りなどの本心に対する恐怖という心理はあまり理解出来なかった。私は、少年の頃は、人間に対してひどく疑ってみたり、本心に恐れるようなことは決してなかった。しかも、葉蔵も他人にあまり本当のことは言わずに本心を明かさずにいた。その代わりとして、「道化」を他人にしてみせたりしていた。それも、おかしなことだと私は思った。自分の本心が言えないから「道化」をするというふうにはならない。けれど、葉蔵はそれしか出来なかったのだろう。自分が恐怖したくないために、相手を怒らせないために相手を笑わせることに努めたのだ。

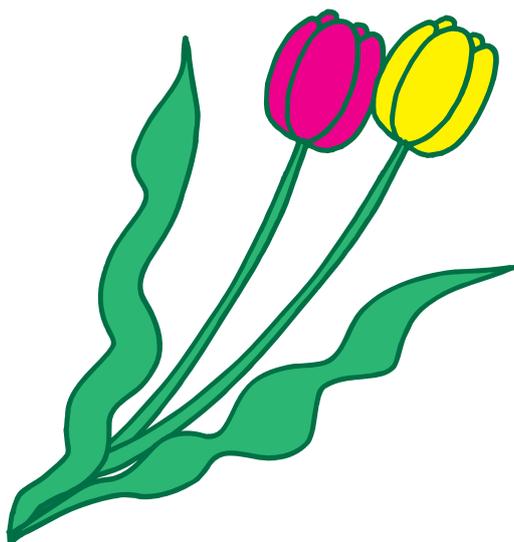
しかし、今、人間に対し疑ってみると、人間はいつでも誰でも、本心を言っているとは言えない。言えないというか、おそらく、ほとんど本心は出していないと思う。全て本心で言っているということはある得ないだろう。それに、自分で思っているものが、本心というものなのかも分からない。本心を言い合って理解することは、無理なのだ。

手記の中で、「道化」、「日陰者」、「非合法」などの言葉が何度も出てくる。これは、葉蔵の性格や生き方のようなものに関わっている言葉として出てきているが、これも、太宰治が自分と置きかえ表現するために使ったのだと思う。はじめの方に言ったが、太宰治は、これを書き上げ、1ヶ月後に自分で命を絶っている。だから、太宰治は、死への決断を思わせるような表現や言葉を書き出している。葉蔵は、ほとんど人間とのコミュニケーションというところで「道化」を使っていた。「道化」で自分の本

心も相手の本心も見えないようにしていた。そうして、自分と相手をごまかしていたのだろう。だから、自分の本心をあまり表に出さないという意味で、自分を「日陰者」だと言っているのだと思う。それに、「生活」や「世間」が何なのか分からないとも言っている。これも、自分のことを「日陰者」、「非合法」であると言ったように、自分は「人間離れしている」ということを言いたかったのではないだろうか。自分を人間離れしていると言うことで、自分はこの人間界にいる意味がないのではないかと、やはり自分を追い詰め、死を決意しようとしていたのかもしれない。「生活」や「世間」が何なのか分からないと言ったのは、人間界のことをわざと認めたくなかったのだ。他にも、この小説の冒頭の部分の葉蔵（太宰治）の写真を、人間離れした笑いだ、猿みただ、表情のない特徴のない顔だなどと批評している。やはり、「人間離れ」、「猿」などというキーワードからも、人間界から逃げ出したいという気持

ちが伝わった。

私は、このように少しでも自分が人間離れをしているとか、死を決意しようとしたことはなかった。おそらく、これから先も、自分で決断することはありませんことだと思う。太宰は、葉蔵のように葉にも手を出していた。だから、彼は、死を意識して、自分から決断していくことにしたのかもしれない。私は、死を意識することなど少しもない。まず、死が結末である人生なんだという実感すらない。しかし、この小説を読み、自分の命のはかなさや尊さが分かったと思う。自分で決断してしまえば、簡単になくしてしまえる、そんなはかないものなんだと分かった。そして、今、自分がおかれている現状はどのようになっているか、成り立っているかを考え、疑ってみるということも大切だと思った。自分の人生の最後がどのような形で終わるかは分からないが、流すような人生にせず、生きるということを感じていきたい。



第56回 青少年読書感想文全国コンクール 熊本県審査入賞者!

第56回青少年読書感想文全国コンクール熊本県審査において、校内読書感想文コンクールで入選した3名を応募し1名が入賞を果たしました。

表彰式は、平成22年12月20日(月)、校長室で行われました。

記

佳 作…2年1組 森田 綾子 「檸檬」を読んで



〈 図 書 館 利 用 案 内 〉

◆開館時間・休館日

平 日	4月～9月 10月～3月 春季・夏季・冬季の休業期間中の平日	8：30～20：00 8：30～19：00 8：30～17：00
土 曜 日	4月～3月 春季・夏季・冬季の休業期間中の土曜日	10：00～16：00 休 館
休 館 日	日曜日、祝日、12月28日～1月4日	

◆貸出について

貸出しの種類	借受者	貸出期間	貸出冊数
一般貸出	教 職 員	1カ月間	5冊以内
	学 生	1週間	3冊以内
	一般利用者	1週間	3冊以内
長期貸出	学 生	春季、夏季、冬季休業期間中	5冊以内
	卒業及び特別研究生	2ヶ月	5冊以内

○図書を借りるときは、借りたい図書に学生証を添えてカウンター係員に申し出て下さい。

○図書を返却するときは、カウンター係員に返却して下さい。

◆注意事項

- 図書、雑誌等は無断で持ち出さないこと。
- 館内では静かにすること。
- 館内では飲食はしないこと。

お 知 ら せ

◆校内読書感想文・作文コンクール

図書館では例年、読書感想文・作文コンクールを実施しています。このコンクールには奨学後援会の協力を得て、図書券を副賞としています。

最優秀作	1点	図書券1万円分
優秀作	3点程度	図書券6千円分
佳作	10点程度	図書券4千円分

作品の募集は、7月から8月にかけて行っておりますので、多くの募集をお待ちしております。詳細については図書館に掲示します。

なお、新1・2年生につきましては、国語科からの春休みの宿題としての読書感想文も対象となりますので、力作をお願いします。

◆卒業・修了予定の学生へ

- 貸出中の図書は早めに返却して下さい。
- 未返却の学生は、卒業・修了判定会議にその旨報告します。

図書館利用状況報告

1. 入館者数（平成22年4月～12月）

入館者数	月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	合計
	通常時間内	4,382	3,528	5,478	5,152	3,693	2,101	3,686	5,539	3,271	36,830
	夜間開館	765	1,405	1,662	1,804	579	夏期休業中	864	1,097	590	8,766
	土曜開館	44	113	145	127	0	夏期休業中	76	145	101	751
	合計	5,191	5,046	7,285	7,083	4,272	2,101	4,626	6,781	3,962	46,347

蔵書数及び雑誌等の種類

1. 蔵書数（平成23年1月1日現在）

区分		総記	哲学	歴史	社会科学	自然科学	工学	産業	芸術	語学	文学	計
図書 の 冊 数	和書	6,107	2,812	5,219	5,868	10,096	18,257	1,034	2,821	3,036	12,471	67,721
	洋書	541	16	48	28	717	1665	13	21	1,043	934	5,026
	計	6,648	2,828	5,267	5,896	10,813	19,922	1,047	2,842	4,079	13,405	72,747
雑誌 の 冊 数	和雑誌	15	0	2	8	7	25	2	10	4	2	75
	洋雑誌	2	0	0	0	1	10	0	2	0	0	15
	計	17	0	2	8	8	35	2	12	4	2	90

2. 視聴覚資料

種類	DVD	ビデオテープ	CD	LD（レーザーディスク）
数量	222巻	790巻	620枚	190枚



ベストリーダー

(2010 / 04 ~ 2010 / 12 英語多読用図書を除く)

分類 0

貸出回数	書誌情報
9	やさしいC / 高橋麻奈著
7	プログラムはなぜ動くのか: 知っておきたいプログラミングの基礎知識 / 矢沢久雄著
7	強化学習 / Richard S. Sutton, Andrew G. Barto [著]; 三上貞芳, 皆川雅章共訳
7	3週間完全マスター基本情報技術者 / アイティ・アシスト編; 2010年版
7	マルチメディア検定: 公式問題集 / マルチメディア検定問題集編集委員会監修

分類 1

貸出回数	書誌情報
5	超訳ニーチェの言葉 = Die weltliche Weisheit von Nietzsche / フリードリヒ・ヴィルヘルム・ニーチェ [著]; 白取春彦編訳
3	図解でわかる心理学のすべて / 深堀元文編著
3	入社3年までにできること、すべきこと: 素質を開花させる24の法則 / 中島孝志著
3	20代で伸びる人、沈む人 / 千田琢哉著
2	アイデアを10倍生む考える力 / 齋藤孝著

分類 2

貸出回数	書誌情報
7	アインシュタインにきいてみよう: 勇気をくれる150の言葉 / アインシュタイン [述]; 弓場隆編訳
2	アラブが見たアラビアのロレンス / スレイマン・ムーサ著; 牟田口義郎, 定森大治訳
2	世界の小さな村 / ピーピーエス通信社写真
2	3日でわかる日本史 / ダイヤモンド社編
2	歩いてまわる小さなロンドン / 江國まゆ著

分類 3

貸出回数	書誌情報
6	経済のことよくわからないまま社会人になってしまった人へ: ひとめでわかる図解入り / 池上彰著
6	SPI 解法の極意: 内定獲得のメソッド / マイナビ編集部編; [2012年度版]
6	裁判長! 桃太郎は「強盗致傷」です!: むかし話を刑法で裁いたら / 小林剛監修
5	なぜ高専の就職率は「100%」なの? / 佐々木章太著
5	するどい「質問力」!: 図解「問題」を1秒で解決する: 「できる人」が駆使している実践! ロジカル・シンキング / 谷原誠著

分類 4

貸出回数	書誌情報
12	大学編入試験問題数学 / 徹底演習: 微積分・線形代数・応用数学 / 林義実, 山田敏清共著
9	詳解物理学演習 / 後藤憲一, 山本邦夫, 神吉健共編; 上
9	基礎有機化学 / 中崎昌雄著
8	マトリクスの数値計算 / 戸川隼人著
6	新編高専の数学: 問題集 / 田代嘉宏編; 1

分類 5

貸出回数	書誌情報
15	第一級陸上特殊無線技師試験集中ゼミ / 吉川忠久著
13	電気回路の基礎 / 西巻正郎, 森武昭, 荒井俊彦共著; [正]
13	無線工学の基礎 / 安達宏司著
12	一陸技: 第一級陸上無線技術士 / 電気通信振興会; 平成15年7月期~平成20年1月期
11	図解デジタルICのすべて: ゲートからマイコンまで / 白土義男著

分類 6

貸出回数	書誌情報
3	ロングセラー商品の舞台裏: ヒットを続けるのには理由がある: 国民的商品から学ぶ企画、開発、営業・宣伝のすべて / 成美堂出版編集部編
2	図解売れる色とデザインの法則: 色・形・パターン・配置に潜むロングセラーの秘密 / 高坂美紀著
2	世界のかわいいパッケージ / m&m&m's 著
2	フリー: 「無料」からお金を生み出す新戦略 / クリス・アンダーソン著; 高橋則明訳
2	売れる色の理由: 実例で読み解くカラーマーケティング / 芳原信著

分類 7

貸出回数	書誌情報
8	作曲本：メロディーが歌になる／野口義修著
5	頭がよくなるクラシック入門／樋口裕一著
5	Design basic book：はじめて学ぶ、デザインの法則／生田信一，大森裕二，亀尾敦著
4	シブすぎ技術に男泣き！：ものづくり日本の技術者を追ったコミックエッセイ／見ル野栄司著
4	理系の人々／よしたに著；2

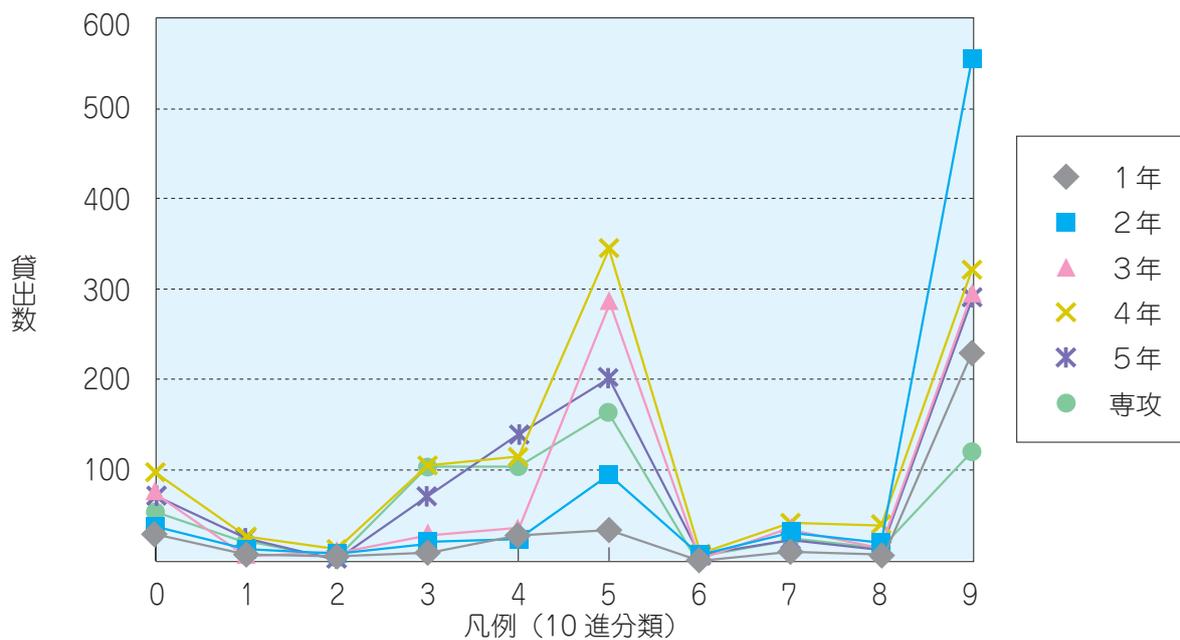
分類 8

貸出回数	書誌情報
12	日本人の知らない日本語：なるほど～×爆笑！の日本語"再発見"コミックエッセイ／蛇蔵，海野凧子著；2
6	TOEIC テスト新公式問題集／Educational Testing Service 著；国際ビジネスコミュニケーション協会 TOEIC 運営委員会編；Vol. 4
6	TOEIC テスト 3 ヶ月トレーニング／鹿野晴夫著；千田潤一監修；470 点編
6	SEED 総合英語／和田稔編著
6	解きまくれ！リスニングドリル TOEIC TEST／イクフン著；part 1&2

分類 9

貸出回数	書誌情報
20	もし高校野球の女子マネージャーがドラッカーの『マネジメント』を読んだら／岩崎夏海著
16	キケン／有川浩著
13	1Q84 (ichi-kew-hachi-yon)：a novel／村上春樹著 book1
12	1Q84 (ichi-kew-hachi-yon)：a novel／村上春樹著 book3
11	告白／湊かなえ著

凡例ごとの年間貸出数



(平成22年1月～平成22年12月)

10進分類	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	合計
凡例	総記	哲学	歴史	社会科学	自然科学	技術	産業	芸術	言語	文学	
1年	31	9	7	9	29	34	2	10	7	228	366
2年	38	13	8	21	24	95	6	31	20	554	810
3年	75	7	10	28	34	285	5	37	16*	295	776
4年	97	26	13	104	117	345	8	42	39	320	1111
5年	73	25	1	72	139	203	7	23	12	289	844
専攻科	54	21	2	103	104	163	5	25	14	120	611
合計	368	101	41	337	447	1125	33	168	92	1806	4518

* 多読書を除く

「図書館だより」編集担当委員

図書館長	三 好 正 純
図書館運営委員	大 石 信 弘
電子制御工学科5年	尾 方 和 紀

編集後記

みなさんはアレクサンドリア図書館をご存知ですか。学術や科学を重んじ、民族間の差別のないヘレニズム文化を東方の国々に伝えようとしたアレキサンダー大王の遺志をついで、その死後、今から約2300年も昔にアレクサンドリアに建てられた図書館です。以後この図書館はヘレニズム文化の中心地としての役割を担い、ユークリッド、アルキメデス、エラトステネス、エピクロスなどのヘレニズムを代表する知識人を排出しました。

さて、この度本年度の熊本キャンパス図書館だより「くぬぎの森」第22号をお届けする運びとなりました。熊本キャンパス図書館を通して培われている文化を知る手立てとして読んで頂ければ幸いです。お忙しい中、寄稿していただいた方々にはこの場をお借りして厚くお礼申し上げます。図書館長の三好先生からは、本屋さんや電子図書館では味わえない図書館だけが持つ独特な雰囲気について書かれた随想をいただきました。人間情報の村上先生の随想では読書家である村上先生の根底に流れる、ものの考え方に触れることができるかもしれません。図書館でアルバイトをしている学生からは受付業務を通じた随想をいただきました。アルバイトを通して、日頃忘れかけていたことを再認識した人もいます。そして、恒例の校内読書感想文コンクールの入選作も掲載しています。人格形成期にしか感じ取れない瑞々しさを読み取っていただければ幸いです。更に、図書館の利用状況などの情報を掲載しています。ベストリーダーにランクインした書籍の題名を見るだけでも図書館で借りて読みたいと食指が動くこと請け合いです。

時代とともに図書館に課せられた役割は変わってきていますが、一生の財産となる知識・情報を与えることは今後も図書館に課される重要な使命だと思えます。みなさんもぜひ熊本キャンパス図書館を通して、熊本高専にしかないヘレニズム文化を発信してください。

図書館運営委員 大石 信弘